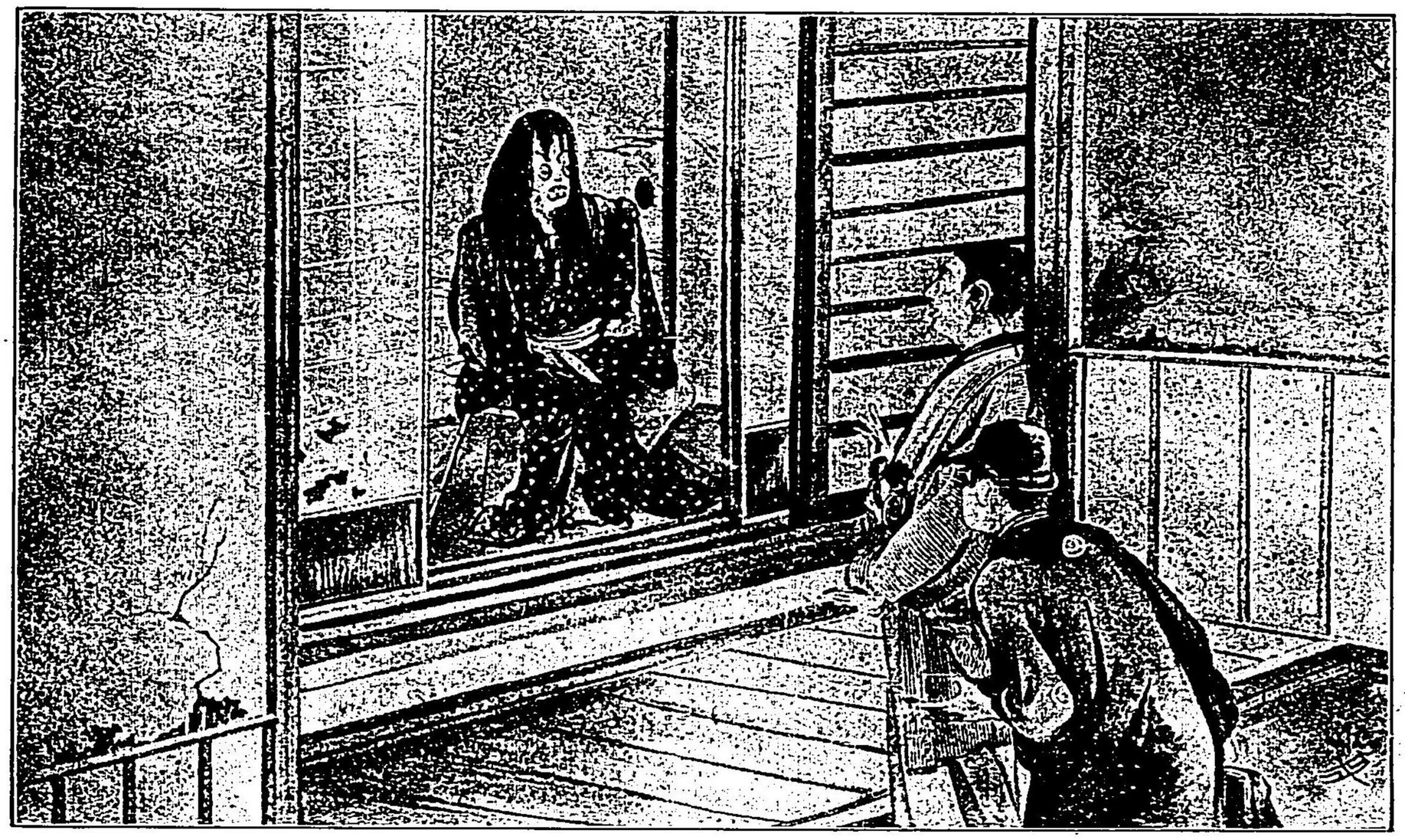
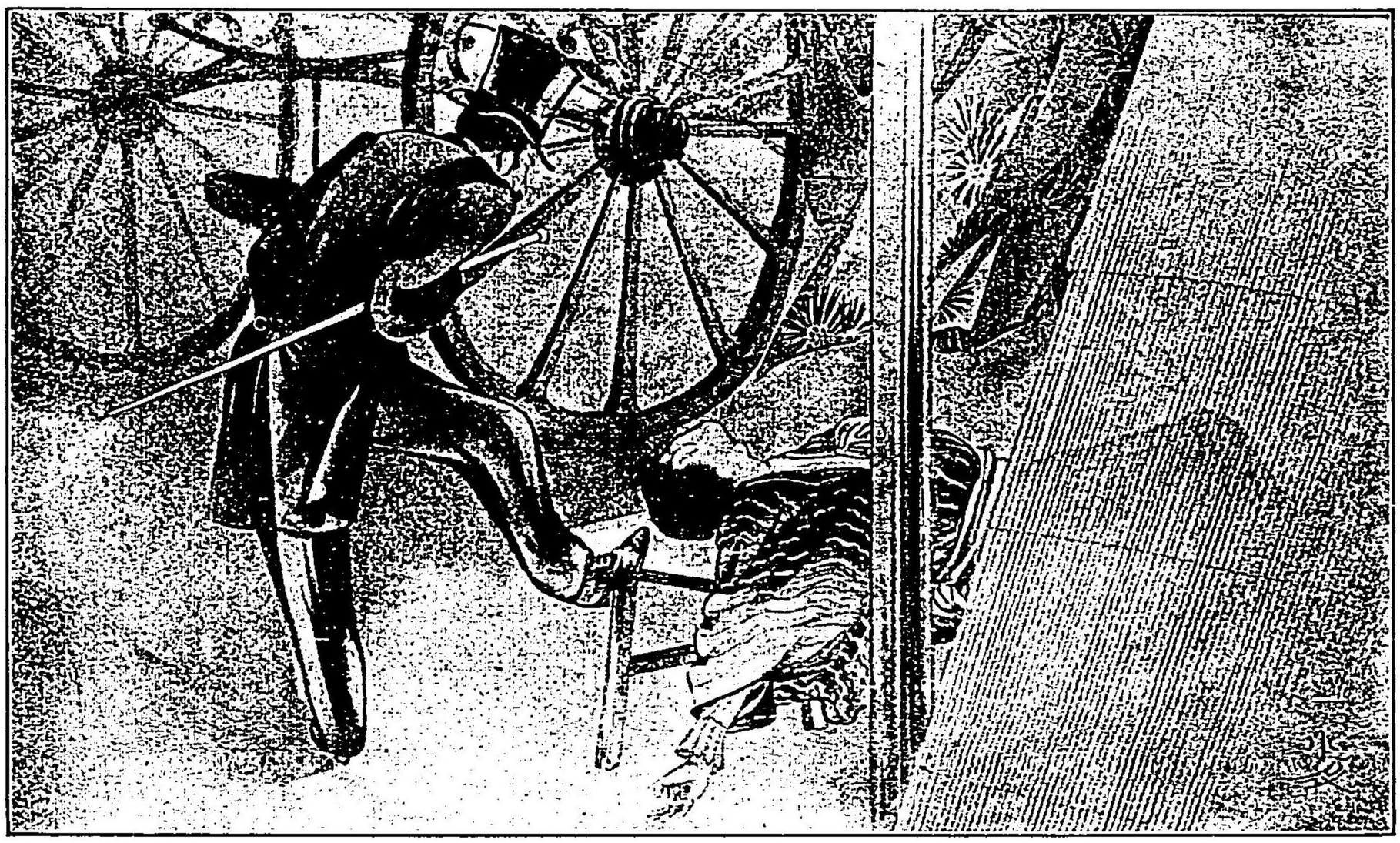


栗原亮一狂人と見せかけて偵鬼を豫防す



中野梧一藤田傳三郎の頭を蹴る

所謂明治維新の原動力と明治政治史の研究

人物と稱ばれ、偉人と敬せらる人も、吾れ〻時代があつたけれども其半生が、幾に出たのと、一は其人の天性に往來する所が、聊か尋常人と異なつて居る所である

吾人は強て、天才を養ふことが出來ぬとしても、人物の行動に則るだけは之を力めなければならない、然るに彼が人間の弱點で、眼前の小利や眼前の快樂に迷つて、永遠の利益と永遠の幸福を忘れるのである、其中には光陰も矢の如くて、見る〳〵白髮の老人となつて終

まう。

かふなつてから、昔の夢が醒めて、何程後悔したとて及ばない、五十年の長い間、何の歴史をも残さずに棺を蓋ふのである。

吾人は世に生れた以上は、少くとも歴史上の人たらんことを希望して居る、して見れば宜しく古今の人物に則とり、又古今の偉人に倣はなければならぬ。

そこで本書は、現下の人物が半生中の逸談逸事を集めて冊子としたもので、若し之を讀んだなれば人物の如何を知ることが出來ると同時に、立志修身の龜鑑となすに足るのである、余輩が本書を世にした所以は、又實に茲に因るのだ。

明治三十五年二月向島の逢舎に於て

著者識

目次

飲席に夜打して凱歌を揚ぐ……一頁
狂人と見せ掛けて債鬼を豫防す……三
義太夫を語つて聽者只の一人……五
男根を斷たんと欲して幾度か能はず……九
護身刀一口此價一萬五千圓……一一
頭を蹴て精神を勵ます……一三
露店の婆に二百兩を惑まる……一七
貴樣は馱目だ腕車も挽けぬから……一九
惡藝を仕損ふて料理店を逃出す……一九
茶菓子を喰はれさる新妙法……二一

稲荷堂を焼き拂ふ……二三
洋服を着遊ひて入院を拒絶せらる……二七
月給を貰はねば日給も取らぬ……二九
政黨は教育家の禁物……三二
二千圓と僞物……三三
命は取られても大切の金輪か殘る……三四
飯時の來客は無用……三六
御前も國會議員かい……三七
貧書生に糊口の途を授く……三九
貴樣は餓鬼大將だな……四一
五造と云ふ奴は茲に居る……四三
昔の事を御忘れなさるな……四五

富士頂上に大砲を据へて北京城を打崩す……四七
第二の加藤清正を氣取る……四九
貯蓄して厚恩に酬ゆ……五〇
講義を賣るの書痴にあらず……五二
如龍如虎……五三
論文を出さずして卒業す……五五
人力車夫も今は代議士……五七
縣吏を勸られて辭す……五九
人夫となつて報酬拾錢……六一
獨逸語の研究を厭ふて退校す……六三
車上往來を厭はず謠ふ……六五
有形的の負債はあるか無形的の負債はない……六七

娼妓の解放を斷行して名を博す……六九
無頓着にも程がある……七二
天下の雨敬を知らないか……七三
一枚の原稿二千五圓は高過る……七五
金堅と書立てられて閉口す……七七
六時間の演說代は二千弗……七八
支那料理と鰕の講釋……八一
意見行はれずして辭す……八三
貴樣は弱い癖に强い事許り言ふて居る……八五
豹を買つて處分に苦しむ……八七
今になつて學問の要はない……八九
活神樣大に苦しめらる……九一

三行半の厄介を如何せん……九四
ソンナ弱い奴は大嫌いだ……九六
日本の遣り方は鵜の樣である……九八
婚禮の畧式を申込んで破談となる……一〇〇
書物の賣上代の持逃げを極め込む……一〇一
外國紳士として優遇せらる……一〇三
アラマー旦那さんですか……一〇五
余は筆硯の奴隸にあらず……一〇七
起立では無い着手です……一〇八
勅任官ならうとは思はない……一一〇
國家事業と聞て一杯喰はせらる……一一一
肉躰は退場させても精神は出來ない……一一三

深く其德に服す……一一五
定めて咽喉の瀨を流れたであらう……一一六
葡萄酒の見本百樽とは恐れ入る……一一八
東宮亮を驚かす……一二一
貴樣は何故乃公を殺さなかつた……一二三
背後から鹽を撒かれ自若たり……一二六
チイ少し用心せよ……一二七
强情を以てゞ氏に會す……一二九
昔は小學敎員今は法相……一三一
君もモー命がないよ……一三三
諸君の鼻に異狀は無いか……一三五
碁自慢は後に失策……一三七

船中に角力を試みて外人を驚かす……一三九
君少し遠慮し給へ……一四一
赤兒を貰受けて訴訟を解く……一四二
燒芋代の催促に遭ふて窮す……一四四
十四歲にして碑文を作る……一四六
父は神聖にして犯す可からず……一四八
盆栽を枯らして資本は空……一五〇
放言壯語の後は放追……一五一
附將の紳士と飛んだ仕損ひ……一五三
飛んだ債鬼豫防策……一五五
主人公番頭に叱らる……一五七
案內狀の代りに口上の駈け廻はり……一六〇

硝煙彈雨の中て商賣……一六二
折角の盥物も可惜棚曝……一六四
此陰謀を御存じないか……一六六
脫黨不可の勸告に妻君……一六七
名は大臣實は食客……一六八
名は十萬圓の財產家實は廿萬圓の借金……一七〇
自家製造の佛語と馭者の解釋……一七二
法を聽て笑ふ者は外道なり……一七四

名士經世奇談目次畢

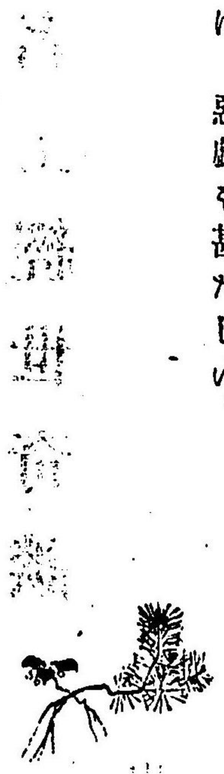
名士經世奇談

岩崎徂堂著

飲席に夜打して凱歌を揚く

今の山本海相が海軍兵學校に居つた時の事であるが、當時校長は高島將軍で、何でも校中の汚穢物は、悉く賣つて金にして置くと云ふ有樣であつた、所が夫れが積つて餘程の金高になつた、然し其當時は會計法なども整理して居らなかつたから、代金の處分法も定めてある筈はない、校中の者が寄るとさわると處分の評議が出たが、結局教員の慰勞會みた樣なものを開いて、飲み料にして終まう事に決し、或る晩一同が酒樓に會合して壯んに飲み始めると、聽き込んだ

のが例の權兵衛先生で、何んだ汚穢物の賣代金で酒を飲んで居るテ、それは怪しからん話だ、我々も其汚穢物の原料を供給した一人である、夫れを敎員許りで勝手に費つて我々に内々とは默つて居られん、是非分配に與るの權利があると云つて、同氣を求めて高島等が飲んで居た酒樓に夜打と出懸けた、一同は夢にも知らずに、飲や唄やつて居ると、突然權兵衛先生が先頭で席上に侵入したから、一同は地震か火事かと計りに驚て立騷ぎ始めた所を、攻擊軍は本城を乘取つて鯨飲馬食、大荒しに荒し拔いて、凱歌を揚げて引き返つたとは、惡戲も甚だしい。



狂人と見せ掛けて債鬼を豫防す

栗原亮一が根岸に住んで居た時の話だが、丁度年末になると、例の借金取りが遣つて來て毎日〳〵苦められた、君も初のうちは外債募集で辛くも鬼を防ぎ止めて居たが、到頭防ぎ切れなくなつたので、先生何卒か凪平の智、蘇張の辯を假りて其場を凌がうと、種々の名策を考へたが、中々出ないので、氣を揉んで居るうちにやつと三四日經つて奇案が浮んだ、之れならば差支はないと、直ぐに近所の者に栗原亮一は發狂したと云ひ觸らさせたのである、けれども貸主はまだ夫れを知らないので君の宅へ押し懸けて行くと、成程門前から見れば、先生發狂でもしたのか、玄關の眞中に蹲踞み、夜具を着て手拭を被つて居る、債主も之れには驚いた、ドーも仕方がない、氣

狂に貸したのは此方の缺點だ、催促した所が取れない、何れ癒つてから出懸て來やうと言つて、何れも門前から歸つて終まつた、所が茲が栗原の奇策で、玄關に居る奇怪な者は人間の栗原でなくつて、先月中江篤介から貰つた四斗樽に、大夜具を着せて、一升徳利に手拭を被らせ、そつと自分の樣に見せかけて、本尊の栗原は奥に隱れて樣子を窺つて居たのであつたとは、君の頓才にも感服するのである。

義太夫を語つて聽者只の一人

凡て人の若い時代には、只血氣に驅られ前後左右も省りみないで無分別の行ひをする事が多いのである、然し孔子が云ふた樣に、過ちを再びせないとか、若くは過つて改むるに憚ることなかれとか、いふ風であつたならば、我輩は夫れで滿足するのである、そこで西村與兵衛が壯年時代に付ての極面白い話があるが、此男は若い時分には非常に遊藝が好きであつた、其中でも義太夫に熱中して本業にはちつとも身を入れない、今日は何會の義太夫、明日は何處のおさらひと、駈け廻つて歩き、一寸も自家に居た事がない、兩親や兄弟が意見しても、馬の耳に念佛で、一向に解らぬといふ始末には、御本尊の太夫は兎もあれ外の者は嘸々困り切つたであらう、所が或日某所

に義太夫の會があつて、君にも何卒來て語つて貰いたいと招がれたので、先生忽ち天狗になつて終まい、宜し太夫が此咽喉を聽かせて一番多くの奴を驚かしてやらうと夫れから仕度して出懸けて行つた、其日の語り物は伊賀越の八、忠臣藏の八、玉藻前の三、朝顔日記などのびらが下がつて居つた、すると聽者も大分集まつたから語り始めた、聽がて四五人計り遣り終へると、今度は君の番になつて來たのである、夫れから君は高座に上つて得意の朝顔日記大井川の段を語り始めた、其妙所になると一層聲を張り上げて己れを忘れて涙を拭ひながら一生懸命にやつて居つたが、心窃かに思ふのに、定めて多くの者は乃公の語りぶりに感じて嘸々涙でも流して居るだらうと、大きな眼で席上を見降すと、案外な話で、何時の間にか多くの聽者は、一人二人と立ち去つて仕舞つて、唯つた一人殘つて聽て居たの

が六十餘りの老婆であつた、此老婆は君の顔を見て潸然と泣いては聽ゐて居るので、如何した譯かと太夫の西村も高座を降りて老婆の所に行き「御婆さん御前は何んてそう泣かしやるか」と問ふた、すると御婆は落つる涙を拭ひながら物語るに「申すも耻かしい事ですが、思ひ出せば昔し吾子が淨瑠璃を好んで、此處の會、彼處の席と語り廻はり、遊蕩に遊蕩を仕盡した爲めに、身代迄も潰ぶして終まい、果ては故郷にも居ることが出來なくなつて、今は行衛も知れぬ有樣、今頃は何國の里に耻を耻とも考へず、下手な淨瑠璃を呻なつて居るかと思へば、兩親の嘆きは一方ならず、夫れに年格向も貴方樣と丁度同じ位であれば、貴方樣も又我悴の樣になつてはと、若ひ時の無分別を察せられて、實は悲しく泣て居る譯です」と答た、一語一什を聽た太夫の西村は全身に浸み渉つて、是れは大變な事を遣つたな

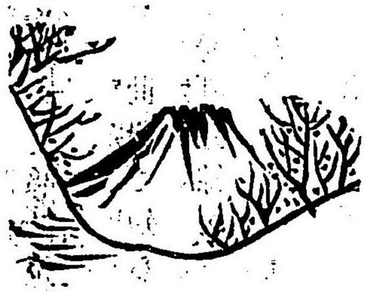
と、始めて悔悟の念を惹き起したのである、元來才智のある西村だから、忽ち昔しの夢が醒めて、大息を漏らしながら「アー乃公は今迄兩親や兄弟の意見も聽かないで、狂れた事をして居つたのは、不孝不友の罪も深い、これからは全く精神を入れ換へて本業を勵まぬと、あの婆の悴の樣な酷ひ目に合はなければならない」と獨り物語りつゝ家に歸つた、夫れより直く淨瑠璃本を四分五裂に引き破ぶつて、深く神佛に誓ひ、熱心業に就かれたといふ話であるが、君が今日の榮譽は實に此時に種を蒔かれたのである。

男根を斷たんと欲して幾度か能はず

法學博士の江木衷と云ふたら、世間で知らぬ者は無い位である、夫れは其筈で博覽强記、如何な紛亂錯綜も立どころに解して終まう、マー近代には稀らしい人である、そんな立派な人物が少壯時代は如何であつたらうかといふ事は、後日の爲めに覺えて居るの必要もあると思ふ、偖先生は中々の好酒家で、加之に好色も、兼備して居る、一方の旗頭と斷言しても宜しい、其證據には酒と女で、イヤハヤ失敗計り重ねた、其失敗を履歷にても書いたならば、少くとも五枚や七枚はあるだらう、今茲に履歷書中の一下りを取つて掲げて見るが、或日先生は自分の男根を見て、之を撫でながら、さも慨然として云ふのに。

エー爾は能くも我れが一身を誤らした、寧ろ之を斷つて終まつたなら、後患を防ぐことが出來よう

と小刀を持ち出して切斷しやうと欲つたが、切れない、元より切れる筈もない、夫れからは失敗する度毎に握んでは切斷じやうとする事が、殆んど六七回、如何しても果し得なかつたとは、隨分御可笑な話である、君が今其昔しを想ふたならば如何に感ずるであらうか。



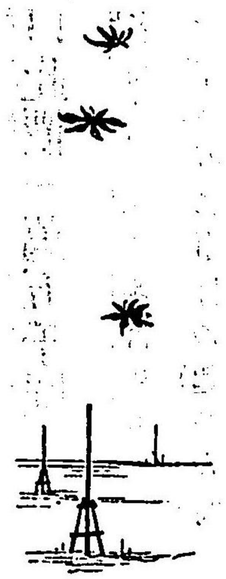
護身刀一口此價一萬五千圓

青年小説家として其名高く、且つ著書も鮮くない二十三階堂主人松原岩五郎氏が明治廿七年朝鮮に事件の起つた時の事であるが、國民新聞社の派出員となつて朝鮮に航し釜山に上陸した、蓋し當時は殆んど暗黑と云ふべき有樣であつたから韓國の事情を探究しやうと欲つたのである、然るに其地の警戒嚴重なる、警官は一見して無賴の徒であると認定し、是れ必らず欵を東學黨に通ずるものであると思ひ、即ち携帶して居た所の一刀を奪ひ取り進行を許されなかつた、爲めに彼れは言を左右に托し大に其道に非ざることを主唱したけれども、聽き入れられないのである、是に於て已を得ず實を陳べて百方懇説漸く內地旅行の許可を得ることが出來たが、未だ兇器の携帶

は許されなかつた、されば彼れは又た滿面朱色を呈し議論百出紛々辯難を試みた、爲めに漸く手續書を提出して携帶することを得ることが出來たのである、此の時の書中に、刀の價格を記さしめられた、彼れは殘念の餘り筆を執つて濃墨で白紙に燦然と揮ふた。

一　護身刀一口　此價格一萬五千圓

と記し終つて直ちに出發し、韓國の事情を偵察したと云ふ話であるが、之を以ても彼れの膽大と其の氣慨心に富んで居ることが解かるのである。



頭を蹴つて精神を勵ます

藤田傳三郎が中年時代に、實業界に投じて見たが、偖て何を試つても、失敗計りするので、自暴心を起し毎日毎晩酒を飲んで居つた、そんな工合であるから、誰れも心配して呉れる人も無くなつて、殆んど無賴の徒に陷らうと云ふ樣な姿であつた、或時飲み過ぎて道の傍に横に臥て居ると、知らず〳〵馬車に乘つて通り掛つたのが、例の中野梧一で、此樣を見て馬車を停め、降りて側に近寄りて見ると、藤田であつたから堪らない、此奴めかふも墮落して終まつたか、一番夢を醒ましてやらうと、穿いて居た靴で藤田の頭を蹴るかと思ふと、何とも言はずに再び馬車を馳らせやうとした、蹴られた藤田は痛いから直に目を醒して見ると、昔に有馬温泉で共に兄弟の約束を

した中野梧一であつたので、君は中野に向つて何故此く亂暴するかと詰問した、すると中野の曰ふのに、我れは嘗に汝と兄弟の約を結んだ、其一人が路傍に臥て居るから、人でなくして畜生である、今は畜生と交るの必要はないと、其儘去つて終つた、殘された君は深く遺憾に思つたが、後日になつて中野が全く君を勵ますためにしたのである事が知れて、是れより君も改心して商業に勤勵したと云ふ話である。

露店の婆に二百兩を惠まる

古河市兵衛が未だ志を立てない幼少の時代であつたが、近傍に大福餅を商ふ露店の婆があつた、其の婆は市兵衛の風采眼光の非凡な所を見たのである、夫れが爲めに彼れ市兵衛を私かに招き、御前樣は將來有望である、殊に其の行動に於て必らず貴郎は後日立派な人物になるのであるからと曰ふて、「妾は蓄た二百兩がある、左れば今まで貴郎に此金を贈る故貴郎は此の金を以て青雲の階となさしめよ」と懷中より探り出した二分金二百兩を出した、此を見たる彼れは驚いて謝して曰ふのには「其の好意は謹て拜領するが、然し婆に後日の證となるべき者がない又た何の故なくして婆より此大金を與かるは不本意であるから、願はくは證文を入れて暫くの間恩借しよう」

と云ふて、終に其の二百兩を借り受けた、而して彼れは業がなつたならば例の婆に對し深き恩を謝さなければならんと思ふた、果して後ち意の如く今日の榮譽を見ることを得たのである、去れば彼れは例の婆を招へて、厚く昔日の恩を謝し、且つ曰ふのに「恩金の二百兩願はくは予をして永く利用せしめて呉れい」と云ふて元金を返濟しないで年々利足と稱して金二百圓を贈與し、彼の婆の養老の資に充てさうであるが、吾人は之を聞たならば眞に古河市兵衛の美舉であると賞贊しなければならぬのである。

貴様は駄目だ腕車も挽けぬから

岩越鐵道其他諸會社の重役として、又た新潟の一大回漕業者として、現今實業界に雄飛して居る濱政弘が曾て書生の時分であつたが會々岩崎彌太郎に見へたことがある、その時彼れは弊袴短褐を着け大なる烟草入を腰にぶら下げて請ふて曰ふのには「どうだい岩崎さん僕を何にかに使ふて呉れないか」と政弘の聲并に容貌を熟視して居つた岩崎は、問ふて曰ふのに「一躰貴様は何國の者か」と、政弘問へに應じて「余は日本人よ」と答へた、彌太郎之を奇であるとなし、更らに又た問ふた「夫れでは貴様、何にか出來るか」と曰ふと「何でも出來ない」「夫れでは腕車位は挽けるか」「ウム腕車位は挽けるだらう」彌太郎の云ふのには「好し夫では明日から宅へ來て腕車を挽

け」と政弘唯々として其の命に服した、居ること幾くもなくして彌太郎が政弘を私かに呼んで曰ふのには「貴樣は駄目だ、腕車も挽けぬから、今より此手紙を以て郵船會社に行け」と言はれたので、政弘心中私かに考へて見ると、是れ失敗したのであると思ふて悄々として半纏股引のまゝ郵船會社へ行つたのである、すると其の書狀を受付に投じてのち返書を待つて居つた、所が稍暫くにして奥の方から洋裝した社員が出て來て、慇懃に迎へて「こちらへ」と請はれた、そこで是れは何事であるかと行つて見ると、直ちに社員に任せられ月俸五十圓を給すると云ふ辭令を授けられたので、政弘呆然として其の意外であることに驚いたそうだが、政弘が今日の幸運に際會したのも夫れが端緒であつたのである

惡藝を仕損ふて料理店を逃出す

關西鐵道會社長の鶴原定吉氏が大失策をした話がある、或る日帝國銀行大阪支店長の可兒彌太郎と一緒に北濱の灘萬と云ふ料理店に飲みに往つた、其時氏は如何いふ積りであつたか、今日は可兒の奴を一つ笑はせる工夫はあるまいかと種々思案を廻らした上句、浮んだ名案と云ふものは先づ可兒彌太の可兒は正に蟹に通ずるによつて、此奴は一番二杯酢で待遇して、可兒は申すに及ばず女將や女中までも笑はしてやらうと、夫れから女中に命じて畑德利に酢を一杯持て來させ、極内々で可兒が便所に行つたあとで、例の畑德利を温ためて全く酒を温めて置く樣に見せ掛けて、軈かで可兒が歸つて來ると例の熱い奴を一杯遣り給へと云つて、猪口へ波々とさすと、彼奴は夫

れとも知らずにグイと飲んで終まう、サア酸い顔をして吐き出ずてあらう、其時とそ面白からうと、獨り呑み込みて、女中の酒ならぬ酢を持つて來るのを待つて居たが如何したものか來なかつた、折柄隣り座敷で大きな聲で「何だ馬鹿にしていやがら、酒と見せかけて酢を飲ませやがつた、酷い畜生めだ」と非常な喧嘩で力氣んで居たものがある、聞けば何となく知り人の秋月清十郎なので、先生は是れは大失策した、女中の奴め意氣地のない事をして、此方へ持つて來る酢を間違つて秋月が所へ持て居たな、夫れでは一番遣り損ひをしたと、仔細を打開けて可兒に話すと可兒も聞て、左樣であつたかと、怒る事も出來す、鶴原も大味噌を付けて料理店を逃げ出したと云ふ話である

茶菓子を喰はれざる新妙法

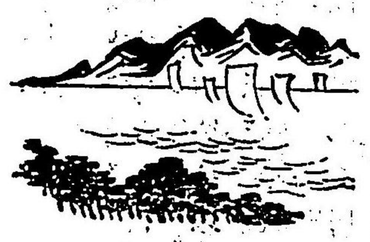
金原明善は尾張出身で實業界の偉人と呼ばれて居る、常に勤儉と精勵の四字は彼れか念頭を離れない、君に就て面白い話がある、或時客に向つて云ふのに、茶菓子などゝいふものは全く虚禮で、ホンの形式的のものだと申して宜いのである、殊に或場合には出されて却つて客が迷惑を感ずることが無いとも限らない、所が困つた事にはそれが我國の慣習で忽ち廢めると云ふ譯にも行かないから、乃公はそこで名案を發明した、先づ茶菓子は氷砂糖と一定し、其の氷砂糖を瓶の中に入れた儘客の前に出すのである、さうしたなれば客は必らず一人でも其の瓶の中に手を入れて氷砂糖を攫み出す者はない、此くした時には、茶菓子は少しも其量を減じないから、幾年經つて

も客の來る度毎に用か足りるのである、之れが乃公の發明した茶菓子を喰はれない新妙法だと語られたので、客聽て啞然。

稲荷堂を燒きはらふ

廣島縣の勸業課長であつた十文字信介は、曾て陸軍少將佐藤正の邸に假住へをしたことがある、所が彼れ以爲らく勸業吏は宜しく躬ら耕さなければいけないと、幸ひ邸内の廣きに任せて菜を蒔き豆を植へ鷄を飼ふて以て得々快哉と呼んで居つた、すると一夜盜があつて、窃かに鷄を持ち去られた、所が信介眞赤になつて憤つたけれども最早や如何ともすることが出來ない、依つて其の翌晩になると彼れ棍棒を携へて其の再び賊の來るを待つ、深夜四更になると果して宅内を襲ふ者があつて、コツ〳〵戸を破つた響が耳朶に徹したので、忽ち彼れ躍り出でゝ大喝一聲棍棒を投げた、すると暗中キヤンと聲して老狐臂を掠めて逃走した、幾くなくして東天漸く白んだ彼れは

僕一人を召して其の狐窟を捜すと、僕の曰ふのには「邸隅に稲荷鎮座し給ひ、大小の神狐守護して地下に住む、古來靈驗顯然と聞く、而かも犯さば神罰あらん」と彼れ信介憤て曰ふのには「稲荷何者ぞ敢て我が飼畜を阻む、吾今天に代つて此盗人稲荷を夷げん」と直ちに其の稲荷堂に石油一罐を注ぎ火を點じた、火焔天に漲り老狐小狐悉く東西に逃走して仕舞たと云ふ話である。



洋服を着違ひて入院を拒絶せらる

平沼が昨年貴族院議員の補缺撰擧に競爭して、やつとの事で當撰したのは宜かつたが、偖てなつて見ると月にむら雲花に風で、社會から種々の批難攻擊が出た、あんな金錢の奴隷を然かも日本帝國の議員にするといふのは恥入る譯だとか、或は彼れは議會を侮辱するとか、何んだかんだと一時は擾ぞしくあつたので、貴族院議員の内にも、平沼の同列を排斥する者も出來、殊に或議員の如きは平沼に直談辭職を勸告したといふ樣な姿であつた、所が御本尊の平沼は、尋常の注告位では中々承知しない、同列するのが嫌やなら君の方から辭職したらば宜いじやないか、と言はぬ計りの顏附をして居るので、之れには世人も持て餘ました、軈て十二月何日は議會の開院式と

定まつて天皇陛下の行幸もあれば、議員一同は大禮服若くは燕尾服を着て上院するの例規であるのに、平沼は如何した譯か當日はフロックコートでやつて來て、いざ玄關から這へらうとした所を二三の守衛に擯まつて、例の規則違反を宣言され澁々と逆戻したとは、とんだ遣り損ひである。

月給を貰はねば日當も取らぬ

陸軍省の御用商人として隆々たる大倉喜八郎が往年のことであるが、業務の必要上から、歐米の視察をしたことがある、其の時海外に航して居つた者は木戸孝允、中井弘等であつた其時分には日本人で歐州を漫遊した者は官吏とした所が實に稀れであつて、殊に實業者では、殆んどないと云ふ有樣であるから、凡てのことが幼稚なのである、所が日本は日毎に西洋風に押移つて來から、政府に於ては官費で役人の留學生を派遣したのである、斯く世の中が開明に趣き益々多忙の時を迎へたのであるが、備商賣上の實見を仕樣杯と云ふものがない、左れば彼れ喜八郎は奮發して歐米に航した、まづ、米國や濠洲等の狀況を視察して獨逸から英國に航し佛蘭西を經て伊太利へ旅行す

るとになると、たま〳〵木戸孝允、中井弘等と同行になつて、巴里から羅馬にかけて所々を見物して行たのである、すると彼の中井と云ふ男は一躰談の好な人物であつた、其上木戸も愉快な人であるから、旅行中は餘程面白かつたのである、左れは羅馬に着すると當地で名高いコンスタンホテルと云ふ所に宿をとつた、すると其のホテルには宛も岩倉大使の一行が宿泊して居つたので、中井と共に岩倉大使の一行を尋ねて行つた、時に恰度晝餐を喫べ樣と云ふ所であつたから、少し躊躇して見て居つた、すると岩倉公が上席で當時、洋行中である日本の文武官と、外國の貴顯大勢が、入り交りて綺羅星の如く食卓を圍んで居つた、其處へ中井と共に入ると岩倉さんが「イヤ之れは珍らしいまあ何時來た」と言はれたから「ヘイ先刻參りました、先づ御變りも御座へませんか」なんて一ト通り御言葉を申し上

ると、又た岩倉公は「どうだ一處に食事をしたらよかろう」と言はれたが、食卓は文武官が一ぱい列するので席もないと云ふ有樣であつたから、ヘイと立て居ると、其時副使であつた、伊藤であると思ふが、此處に御出でと云ふて席をあけ「早く來たらよかろう」と流石に雅量のある人であるから、自分と岩倉の間を明けた、すると中井は喜んで其の席に着かうとしてズン〳〵先に行つて岩倉の隣席に着たが、大倉は餘り上席であると種々御辭退して居ると「ナニ構はない外に席がないから、此處がよい」と言はれたから「夫れでは甚だ失禮であるけれども、旅行中の事だから御免を蒙りましよう」と云ふて席に着くと、忽ち下席に居る多くの連中は變な顏をして、荐りにぐず〳〵言ふて居のである、夫れから何を言つて居るのであるかと思ふと、彼れ等は商人であありながら上席に列する抔とは甚だ無禮な

奴である、又た失敬であると專ら呟やいて居るのを耳にしたれど、態と聞かない振りをして默つて居つた、所が中井は氣短な男であるから、忽ち怒り出して何にか演説のやうな事を話しかけたので、彼れは夫れではいかんと思ふて、内々止して呉れゝばよいと思ふたが肯かないで、何に構うことはないと云ふて左の如くな意味で演説をした

見渡す所此席上に御座る者は一躰に歴々の御役人樣計りであるが、其役人樣らは皆な大層な月給を貰つて其上に日當のなんのと、いろ〳〵の手當を取つて居る、殊に旅費までも頂戴して威張つて洋行をして御座るのである、所が私の側に居る町人は自分が粒々辛苦で稼へた金で洋行して御座つた、左れば固より月給も貰はなければ日當も取らないで自腹を切て國家の爲めに盡さうと云ふ立派な精神を抱いて居るのである

と云ふて演説したから本人の喜八郎は中井の袂を取つて内證て止して下さいと留めたけれども、中井は少しも耳に入れない、却て尚ほ強情に聞へよがしと大聲を發して、「ナニ構ふものか」と更らに言語を續けて

何卒して斯の如き人物を澤山に欲しいものである、けれども今日にては彼樣な人はありません只だ此大倉一人であると云ふて洒蛙〳〵と惡口を吐いたのである、斯の如くであつたから彼れ喜八郎は冷汗を流して居つたが、夫れが爲めに席上靡然として愚圖〳〵言ふ人が無くなつて仕舞つたそうだが、當時の狀況は官尊民卑の餘弊が未だ盛んであつたから是れらのことは已むを得ないのである。

政黨は教育家の禁物

浮田和民の人物は世人が知つて居るから、著者は今更ら茲に紹介するの勞を取らない、只彼れは立派な學者であるといふ事を一言して置くだけである、偖て君が東京政治學校の講師となつた時の話であるが、其時或人に語つて曰ふのは

教育上に於ては呉越も互に提携をしてやらなければならんが、政黨のために自分の思想を曲げる樣な譯では迚も駄目だ、夫れだから自分は黨氣を措かないのだ

と云はれたさうだが、此點を以ても、君が教育家としての眞價を知る事が出來る。

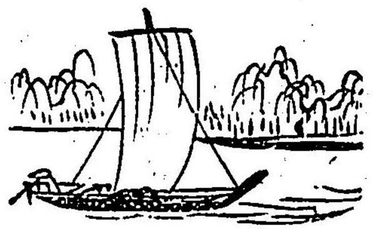
二千圓と僞物

大江卓が嗜好と云ふたら書畫器什ださうである、夫れに付て失敗談があるが、或時大燈國師の行書横幅が買ひたいから、何處かに在つたなら周旋して貰いたいと云ふて、知人に頼んだ、所が何時の間にか此事がある商人の耳に這つたので、こいつは良鳥が來たと、例の商人が大江の家に持つて行つて、本人に見せると、大喜びで早速二千圓と云ふ大枚で買ふた、すると後になつて夫れが僞蹟であつた事が知れて、流石の大江も之れにはグーの聲も出なかつたさうだ。

命は取られても大切の金輪が殘る

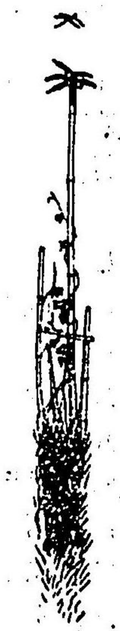
平沼專藏と一言を聞ひたならば、横濱の紳士大盡長者として吾人は知つて居るのである、彼れは能く富の字を解した人物であるから、今日の榮譽を兩肩に擔ひ法螺を吹いて居ることが出來たのである、彼れは平素用ひて居る所の指輪に二種あるさうだ、然して昼間は其甲を嵌めて日暮になつて來ると御嵌替と稱して乙と交代せしむるのである、ある時人怪んで其の何の故であるかを問ふた、すると彼れ專藏が答へて曰ふのは、昼間の中は安心であるから、純金製のを用ゆるのであるが、夜に入つて來ると怖くてならぬから、電鍍製に代替るのであると云ふた、若しも萬一賊がやつて來たならば、生命と電鍍製の指輪は奪れたとした所が、大切である純金のは殘るからと

言はれたので、或人は呆然として彼れの今日富豪を致した所以を解したそうだが、平常の行動斯の如くであるから巨萬の財を積むことが出來たのである。



飯時の來客は無用

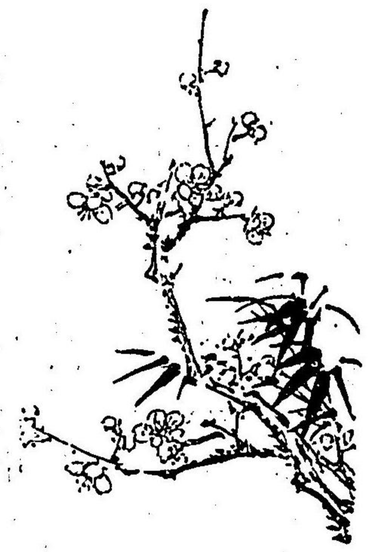
長谷川泰と云へば今こそは衛生局長となつて眞面目を氣取つて居るが元來は落語でも醫者仲間にも豪の者と呼ばれて居る、其證據には數々奇言を弄しては巧みに他を嘲笑罵倒して得意然たるのを見ても人物と性行を推し知らるゝのである、所で茲に面白いのが若し飯時になつて客が居り又は來ると彼れは客に向つて曰ふのに、僕の家には君に喰すとゆふて、別に飯は煮て無いから宜いかい一寸失敬するぜ、と言ひつゝ客を捨てゝ己れは卓を前にし、腹を肥して澄ましきつて居るとは、如何に落語も甚だしく且巧妙な話である。



御前も國會議員かい

近頃のことであるが、鑛毒事件に有名な田中正造は或日友人の家に行つて夕飯を馳走になつて居ると、會々一疋の犬がそこに來たのである、すると彼れは肴を投げて遣つた、所が彼の犬は直ちに其肴を喫べたので、亦た投げると直ぐに喫べて仕舞たそこで彼れ田中が犬に向つて言ふのには、御前も國會議員であるかと怒鳴つた、すると側に居つた人が其餘りの奇言であつて解得することが出來ぬから、夫れは何云ふ譯なのであるかと問ふて見ると、田中の言ふのには、一躰犬と云ふものは、飼家の主人が呉れた食物でなければ喫ふものでない、然るに根性の汚ない行儀も何にも知らない犬になると、如何なる人が呉れたものでも、食物でさいあれば直に喰ふのである、

そこで今日の國會議員は、丁度此の犬の樣に汚ない賤しい根性を以て居るからであると評したので、其の言の適中てあると大笑したと云ふ話である。



貧書生に糊口の途を授く

流石は憲政本黨の才物と呼ばるゝだけに木堂は中々拔目の無い男である、或時貧書生が君の人物を慕ひ訪ふて糊口の途を得んことを求めた、すると木堂手を拍てさも勿體らしく曰ふのに、宜し余に善き妙案を考へ出したゆへ之を君に授けるから能く聞き賜へ、夫れは外でも無ひ君の居る所に、放螺吹指南所と云ふ看板を懸けて置く、そこて客が來て指南を乞ふたら、先づ貴方は田舍向きの放螺を學ばふとするのですか、若くは東京向の放螺をやらうと思ふのかどちらかと聞くのである、私は田舍向の方と云ふたら尾崎の所に向けてやり東京風と云ふたら余の所に寄こせ、是れこそ實に金儲の名計だらう、と一番氣焰を放つたものだから、例の書生は煙りに捲れて、たゞ漠

然として君の邸を辭して歸つたさうである。

貴様は餓鬼大將だな

澁澤榮一と云ふ男は元來資性豪放で亂暴なのである、彼れが幼年の時分初めて浪華に笈を負ふて薩人の折田某と云ふ人物に就て學問した、一體薩藩の士族は無暗に威張りちらし、場合に依ると亂暴を働ひて他藩の人を壓制したのである、夫がため多衆の人は薩藩の士に恐々として一言の喙を容れるものがない、唯々諾々でみな其の言に從つたのである而已ならず、却て阿諛をなし彼れらの歡心を買ひ鼻息を伺ふて自ら其の害なきを是れ事として居つたのである、左れば心中他藩人は快しとして居るものはない、斯の如き有樣であつたから榮一の性として之を屑しとしないで憤慨したのである、或日の事薩人等は彼の師たる折田某を侮蔑することがしきりであつた、之を

見た彼は滿面烈火の如く怒り、是れ好機てあると三島通庸に飛びかゝり「オノレ、貴樣が餓鬼大將だな」と罵倒しながら彼の三島を掴み之を宙に釣り上げ、骨肉も碎けん許りの勢にて大地へドウト投げつけたのである、薩士の多衆は之を見て膽を潰して、彼奴ナカ〳〵強ひやつだなー」と云ふて、其の後ちは彼れ薩人等は威張らなくなつたと云ふことがあつたそうだ。

五造と云ふ奴は茲に居る

三百の代議士中に於て優に其の名を博くした野間五造は、意氣豪放で如何なことがあつても事に當つて屈することがなく極平氣な男なのである、曾て彼れは有馬組合に於て或る事件の爲めに嫌疑を受けて臺北の獄裡に繫留せられたことがある、而して後ち又た衆議員選擧の時に賄賂を行使したと云ふので岡山の獄舍に呻吟した、左れば世人は彼れを目して頗ぶる入獄することが得意な人物であると評する位であつたが、本人に於ては敢て入獄することを名譽であると云ふ念慮がある譯でない、入獄することを好んでやる次第もない、然れども時の機運で已むことを得ないのである、而して彼れは明治三十二年の末であるが、帝國議會が開かれたので、たま〳〵新聞記者室

に詰め合つて居た幾多の記者輩等が論談湧くが如くの有樣で、甲が辯ずると乙が之れを駁し喧々喋々として議員の人物を評論して居つた、所が一人の記者が曰ふのには「僕は未だ曾て野間五造と云ふ奴に面會しないから、能く其の人物が解からんが、一躰彼奴は、何いふ奴だらう」と云ふて未だ其の言葉が終らなかつた、すると突然後ろの方から人が來て、曰ふには五造と云ふ奴は、茲に居る、斯個奴だから能く見て覺へて居つて呉れろとつか〳〵進んで來た、所で記者先生等は後を向て見ると眞に五造であつたので衆の曰ふのに君はそこに居つたのかと

五造又た曰ふて此の位な鐵面を以て居らなければどうして此の議場の椅子に据へられて滔々と自己の意見を主張することが出來ないのである

昔の事を御忘れなさるな

安田善次郎と云ふたならば、世人は實業界の傑物として知て居るのである、そこで彼れ現に己れの管理して居る銀行や會社へ毎日出勤するのである、所が其の出勤時刻を誤つて悤圖々して居ると忽ち彼れの細君が云ふのに、御出勤が遲くなります、御宅の御用は御後に遊ばせと諫言するのである、すると彼れは爭ふことなく妻の言に從がひ「ハイ〳〵」と起つて行くのであるが、實に彼の細君は萬事に懸けてぬけ目がないそうだ、そして細君は何故に斯く物事に精通して居るのであろうかと云ふのに、元と長州藩侯の奥女中を勤めたそうで、夫れが爲めに謹慎自重の念は毫も胸間を脱しないのである、左れば安田家に嫁して尚ほ殿中の風を守つて、常に良人を戒めて曰ふのに、

昔の事を御忘れ遊ばすな、御勤め向きを怠たつてはなりませぬよと云ふのである。是れが爲め彼れの家庭の圓滿なること、他人の羨む所となつて居るのである、斯の如き有樣であるから「善次郎は細君に追出さる」と心配して口癖に云ふて居る。

富士頂上に大砲を据へて北京城を打崩す

日清戰爭の時であつた、或る新聞記者が軍機の秘密を聞かうとて、兒玉現陸相の邸を叩ひた、最初の中は世論雜談に時をうつして居つたが、談會々〻日清戰爭に及んだので、此機を失はず、記者は軍略の機密を探ぐり將來に於ける我が國の方針等も聞かうとした、所が彼れは徐ろに口を開ひたので記者は心中喜んで其眞意を確め樣としたると彼れが云ふのには、折角の御尋ねであるが余の作戰法と云ふても外にはない、先づ天下無雙と云ふ大巨砲を製造して彼の富士山の頂上に据へ置き、遠く敵國支那を眼下に見て、轟然一發を放つたならば北京城を打崩すことが出來るであらう、そうすると此機に乘じ多くの工兵を指揮して、彼の有名である渤海灣を埋めたならば、

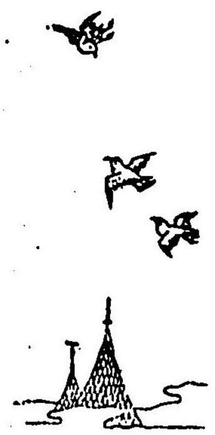
支那の要港要關門は立ち所に消滅するのである、斯の如くてあつたならば我軍全勝を博し其の目的を達することが出來るのである、左れば吾々國民の快擧は此の上も無いのであるし、是れ余が戰略なのである、然して斯の如き戰法に對しては、如何なる智略豪傑でも恐るゝことがないと云ふたので、彼の新聞記者は初めて冷評せられたことを悟り、愴惶何の得る所なくして歸つて來たと云ふことだが、一昨兒玉と云ふ男は居常磊落であつて物事無頓着と云ふ風な人物であるが、矢駄らに彼の意中を探知仕樣抔とした所が、容易にそうゆう譯にはいかぬ。

第二の加藤清正を氣取る

先年朝鮮事變が起つた時、野津大將が全軍を率ひて京城を出發しやうとした、丁度其日は八月の十五日であつたものだから、大將は部下に向つて今日は加藤清正が明兵を破つた吉祥日である、然し我には今妙法の背旗と、三叉鎗とはないけれども、恐れ多くも大元帥陛下よりして賜つた聯隊旗がある、願ふ事には十五日にきつと箕城の麓下に迫つて昔の清正が武功に倣つて見たいのである、一同は宜しく奮發しろと言ひ畢つて意氣昂然たる姿であつたものだから、部下の勇士等は皆奮躍して愉快と叫んだ、之れより軍氣が一層盛んになつて、最早や平壤でも呑んだ樣な有樣であつたとは、大將の奇智又驚くべきである。

貯蓄して厚恩に酬ゆ

守田寶丹と言ふたらば世人悉く知らないものはない、而して彼れが斯の如き妙藥を製出して、今日の繁榮をなした其の淵源を尋ねて見たならば、實に奇運である又た幸福であるのである、夫こで彼の寶丹と云ふ藥は、元と渡邊伊織と云ふた人が大久保仁齋と云ふ人より秘密に授けられた、コロク藥と稱するのである、往年東京市に虎列刺病が發生して益々傳播したことがあつた、すると彼守田は其秘傳の調劑藥を賣出して、大に世人に利益を與へ奇利を博し、後改めて寶丹と銘したのである、而して彼の渡邊と曰ふ人物は最も貧困に生計をして居つたのであるから、寶丹は常に其の恩に報ずる爲め冥加金と名けて竹筒の中に蓄へて來た其の金をば渡邊伊織に寄贈しようとして其の家を訪ひ、冥加金の趣意を陳じ彼の竹筒を贈つた、所が渡邊と云ふ男は元來律義一邊の人物であるから容易に之を受けなかつた、左れど寶丹は強ひて之を贈つたのである、すると後ちになつて其の竹筒を割つて見ると金銀貨を合せて一百以上もあつた、貧困の渡邊は云ふ迄もなく家内一同感激したそうだ、寶丹が現今かく世人に賞揚せられるのも、全く渡邊の力に依つたのである。



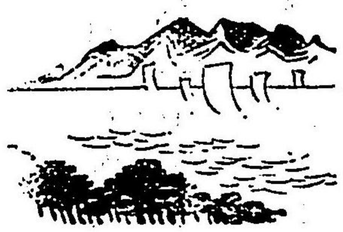
講義を賣るの書痴にあらず

根本通明と云へば博士中夙に氣節を以て知られて居る、君は常に金錢を鄙んで殆んど土芥視する程の人物であるから、隨つて清貧洗ふが如き境遇を免かれぬのである、所が或時東京專門學校で博士を講師に招聘しようと思つて博士の宅に人を遣して相談を求めた、すると偶々月俸は何程差上て宜敷やと問ふだものだから、通明先生一方ならず立腹して言ふのに、我れは決して講義を賣るの書痴では無い、汝は速かに歸れ又我を煩はしてはならぬ、と叱り飛ばされた、使の者は彼れ是れと詫入るけれども先生頑として應じなかつたので、專門學校では再び人を遣はして前使の言を謝し、且つ辭を卑くして懇請したので、流石の頑固爺もとふ〳〵承諾したさうだ。

如龍如虎

船越衛が平素自邸に掲げて居る扁額は如龍如虎の四字である。夫れは大久保甲東の書たのであるが、或日訪問者があつて其の額を指して彼の四字は何にか深い意味があることかと質問した所が、彼れ答へて曰ふのに、何にも別に深い意味があると云ふ譯ではないが唯だ由來がチヨツト面白いからだと、客然らば其の由來を聞かうと膝を進めた、すると彼れは得々として曰ふのに、此は維新前我々が有志家で運動した時分或日大久保の宅を訪ふたことがある、其時自分は甲東に向ひ何にか書て呉れないかと言ふた、すると大久保も快よく承諾はしたが、何と書かうかと頻りに頭を傾けて考へて見たが、何しても好い考案が出なかつた、ソコで自分は大久保の傍らに据へて

在つた二個の本箱に、其一個には如龍他の一個には如虎と書てあつたから、注目してこゝに書てある四字でも善からうと望んだのであるが、所が大久保も微笑しながら、此本箱は古道具屋から買つたのであるが、先日の持主は何者であつたか判らない、けれども如龍如虎の四字は餘程面白く書てあるから、貴公に此四字を書て遣らふと云ふて早速揮毫して呉れたのであると云ふ譯だそうだ。



論文を出さずして卒業す

山田一郎は號を愛川と云ひ文學界に於ける鏘々たる人物である、君が嘗て大學に生徒であつた時、講師に獨逸人があつた、此獨逸人は存外に學識が淺薄で其上人物も下等であつたものだから、山田が張本人となつて高田早苗天野喜之助の二人が之に加擠し愈々放逐運動をしようと相談が一決し、先づ之を總長に迫つたのである、すると總長は君等を慰め且つ論じて曰ふのに、切角多額の俸給を拂つて海外より雇入れたものを忽ち解雇しては甚だ不利益である、殊に君等は遠からず學校を出る人であれば今少しの間勘忍して呉れよと申込むと、一郎曰く強て勘忍の出來ないと云ふ譯はないが、若し勘忍する以上はソコに何か相當の報酬なければならぬが如何であると、切

り込んだので、總長大に窮した末卒業論文を免ずることを以て報酬に換へようと、愛川等之を聞て中々妙だと、手を拍ち遂に約束が出來たさうだが、滔々たる大學卒業生の中に卒業論文を書かないで學位を得た者は此三人の外はない。

人力車夫今は代議士

堅忍の思想を有したならば、物に當り事を處するに如何なる難關でも通るとが出來るのである、茨城縣撰出の代議士根本正は深く此の堅忍の二字を念頭に置き勤勉怠らず、螢雪の苦學を積んだのである、左れば今日衆議院議員となつて、國家の爲め己れの意見を吐露し國利民福を計り、專ら赤誠を注いで居るのである、斯の如であるから議會に名を知られ世人の尊重を招く樣になつたので、決して一朝一夕のことでない、是れ皆な彼れの堅忍の思想が終始念頭を放れず研學せられた其の功なのである、今彼れが苦學をした事に就き言ふて見たならば、往年洋行するの必要が日に切迫して來つたことを認めたものゆへ勉學の資を求めようとして夜間になると人力車夫と姿を變

じ市街を驅け廻り應分の賃金を得、其の幾分は學資に投じ、其の幾分を洋行の本となしたのであるが、其の熱心と精勵とは眞に世人の深く賞讃すべき價がある、斯くも彼れは尋常ならざる苦學勤勉して更ちに倦怠の色がなかつたのである、此の艱難辛苦の裡に洋行費を求め、明治十二年三月を以て横濱を出帆し米國に遊學したのであるが、此時年已に二十七であつた。

縣吏を勸められて辭す

北村英一郎が鄕里は世々富豪であつて、村長の役を勤めたのである、彼れ成長するに從がい慧眼萬人に秀いで神童の名があつた、頃は廢藩縣置の時であるが、宛も彼れは土地の村長を勤めた、すると地租改正と云ふ事になつて、縣廳より官吏が出張して田面の測量をしたのである、所が其の丈量に相違があるを認めた、彼れは忽ち其の不可であることを陳べたと云ふが、其當時は皆な官吏を恐れて居つた時であるから、誰れも官吏のやつたことには誤りがあつても、唯々諾々で其の是非を識別しよう抔と云ふものはなかつた、然るに彼れは聊も怖れず、滔々と己の意見を持し、出張の官吏と議論をした、すると官吏は其の夜縣廳に歸つたので村内の人々は何にか北村に咎

があるではなへかと憂慮して居つた、所が縣廳に於ては却て北村の敏腕であるとを認め、長官は大に彼れを賞し勸められて暫く縣廳の雇吏となつた、けれども彼れは初めより官途に就くを好まないから幾くならなひで辭し、實業界に身を投じたのであるが、彼れの機敏なる現今世人の知る如き人物となり、專ら實業界に雄飛して居るのである。

人夫となつて報酬拾錢

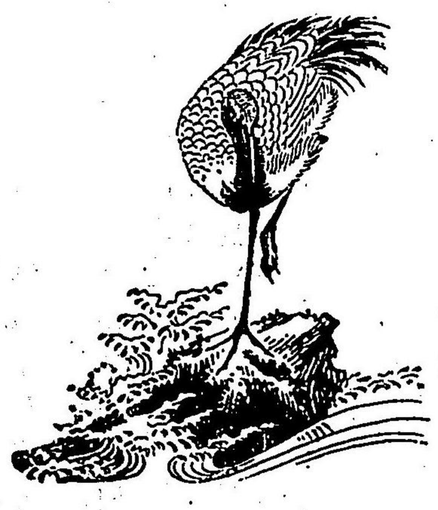
大町桂月が未だ壯年で頃には高等學校に勉學怠らなかつた、すると或時日光へ遊びに行つた、ところが彼れは金錢を亂費したから忽ち囊中缺乏し、一厘の貯もないと云ふ有樣になつて危急眼前に迫まつたので彼れは已を得ないから、土地の某所に於て人夫となつて勞務役々、其の苦痛は甚だしかつた、爲めに彼れは居ること僅かに一日で某所を辭し去ろうとした、所が其の一日の給料を貰う事なつた、すると初め見習のうちは決して一文も報酬は出すことが出來ない之は規則であるからと云はれたので、彼れ大に悲み且つ落膽したのである、茲に於て彼れは種々情を訴へ、懇願して意色慘然たる有樣であつた、人夫長は之を見て甚だ氣の毒に思ひ憫みて金拾錢を與へら

れたと云ふ話であるか、如何なる人物でも身の急迫なる場合には意氣地ないものである。

獨逸語の研究を嫌ふて退校す

朝比奈碌堂が、法科大學に在つた時、獨逸語を研究することを嫌がり蛇蝎の如であつた、左れば彼れは常に獨逸語の研究時間には出席しないのである、斯の如くにて數回に及んだので、時の教師ホークスチストは大に其不都合なることを怒つた、卒業試驗の時になると零點を附して落第せしめられたのである、すると彼れ碌堂も亦大に憤慨して遂に退校すると、其の後になつて一友人が彼の碌堂の下宿を訪ふて慰撫しようと欲した、所が席に肥肉美髯の一紳士があつて頻りに碌堂に對し何事をか乞ふ所ある者の如くであつた、暫時にして彼の紳士は座を去つたのであるが、此の紳士は末松謙澄なのである、而して後ち彼れ碌堂は東京新報の起ると共に其主筆となつて專

ら敏腕を揮ふた。



車上往來を厭はず謠ふ

如何なることでも熱心の者は終に其の彼岸に到達するとが出來るのである、中野武營は往年謠曲を學んだ事があるそうだ、すると彼れは音吐低濁であつて、始の模樣では殆んど大成の望みがなかつた、然るに彼れは堅忍であるから、此等自然的の障礙では更らに挫折しないのである、其上彼れ自身も音聲の悪いと云ふことを承知して居るから、熱心は益々加つて、一層精勵したのである、左れば彼れは車上往來を厭はず平常謠曲の小本を携帶し瞬時をも怠らずに、低い聲で之を誦したのである、その後彼れが熱心倦む所なく勤勉斯の如くであつたから、段々と年を重ぬるに從がひ技愈々進んで來た、現今になつては八十番の謠曲を暗記する樣になつたそうな、彼れの同嗜

好連に傳說して居ると云ふが、實に渠の謠曲に熱心であることは驚く外はない。

有形的の負債は有るが無形的の負債は無い

今まより五六年前であつたが、尾崎行雄が田中正造と共に新潟縣へ遊說に行かれた事がある、すると新潟に於ては、反對黨等が此度尾崎が遊說に來るそうだから妨害の策を攻究しようと言ふて居つた、夫れは如何ゆう譯であるかとゆうに、彼れ尾崎が往年新潟新聞の主筆であつた時、自由黨の或人から金を借て居つて未だ返濟しないから、此回の出張に演說眞最中催促をして遣らうと云ふことに議決したのである、所が此事が何時しか進步黨の耳に這入たから、サー大變なことが出來たと進步黨側では周章狼狽して、兎に角く此事は尾崎に相談するのがよいと云ふことになつた、すると尾崎はトボケ返つて吾輩は未だ曾て負債を拵へた覺へは更らにないと答へた、所が某が

デモ隨分あるでは無いか現に個樣の次第はと借財の事實を細かに並べて說明して見た、けれども尾崎は一向平氣の平左で余輩は成程有形的の負債はあるかも知らないけれども無形的の負債は更らにない、一躰男と云ふものは無形的の負債がなければ、夫れで充分ではないかと言ふて落付て居つたので、席に並んで居つた人々には手を空く呆然した、斯の如き形勢であつたが自由黨員に於ても何ゆう譯であつたか、彼の借金催促の議決は取消して遂に實行しなかつたと云ふ話しであるが、思へば尾崎も隨分鐵面皮な男である。

娼妓の解放を斷行して名を博す

大江卓が會々神奈川縣の權令となつた、時宛も明治七年のことであるが、秘魯國の某滊船號が清國の賣奴等數百人を搭載して横濱に寄港したのであるが、蓋し其の寄港は飲用水に欠乏したので補はん爲めなのであつた、すると彼れ大江以爲く、人にして人を食ふものは夜叉である、又た同性を牛馬に伍せしめて其の膏血を啜るものは禽獸と云はなければならん、左れば今ま余れ東洋君主國の一縣を治めて居る身でありながら、目前に禽獸夜叉のあるを知つて、之を懲らさなければ、何を以て仁義の道を解き人の上位に在つて道德を談ずることが出來ましようと云ふて、直ちに其の船長に談判したのである、すると彼の船長も已を得ずして其の奴隷を解放した、左れば此

の報を聞いた各國の公使は之を賞贊して曰ふのには大江權令の義心は誠とに好いのである、然れども現在日本が娼妓の賣買を公認して居る、斯の如であるならば、其の義心は遂に各國の物議を招くのであらふ、と大江之を聞いて大に驚ひて思ふのに、是れは大變である逆捻は余に於て最も快しとしない所なので在ると、然らば横濱にある娼妓を解放して、外國人の口を塞がなければならんとした、然れども扇町の樓閣連は容易に應じないで、苦情百出するといふ事を恐れたのである、けれど彼れは如何にもして是を實行しなければならぬと、四苦八苦の末遂に一の好案を劃策した、所で密かに高島嘉右衛門、原善三郎、增田嘉兵衛等の有力なる者に泣き付て相談をしたのである、而して彼れ三人をして娼妓解放の建白書を出さしめることに議一決したので、彼れは即夜其の解放の令を發布して忽ち數千

の娼妓を解散せしむることが出來たと云ふが、實に彼れの畫策に長じた所は唯だ感服する外はないのである。

無頓着にも程がある

矢野文雄が報知新聞の社長をやつて居つた時の事であるが、或日新聞社で突然急用が出來したので百方探して見たけれど、更らに其の行先が分からないので非常に困つて居つた、すると彼れは元來磊落で無頓着と云ふ樣な男であつたから、其時は出雲橋側の船宿から船を一隻借て卵の樣な半拍子二人を其の船に載せ込んで、濱離宮の枝垂れ松のほとりに錨を下げて、さも愉快げに太公望をやらかして居つたのである、夫れであるから何程ら探しても分らなかつと、後になつてから大笑したと云ふ話しがある。

天下の雨敬を知らないか

現今豪商中世人呼んで、事業界の企業者となす者は、雨宮敬次郎なるとが知れるのである、彼れが嘗て三千圓の金策に窮した、爲めに割引手形を携へて其の融通を安田銀行に求めた、然るに銀行員の云ふのには、夫れは規則に反くのであるから應ずることが出來ない、雨敬大に憤ッて言ふには『余は天下の雨宮敬次郎である、何ぞ三千圓位の信用に乏しいことはない』然れども同行員は頑として拒絶したのである、所が偶々頭取安田善次郎は、一室に在つて聞いて居つたものであるから、雨敬を呼んで從容として言ふのに、『安田銀行は行則を確守して居るから行員も又た其の業を濫にしない、是れ大に余の喜ぶ所である、而して銀行と云ふものは亦た正に斯の如でなけ

ればならん、然しながら余は今ま足下に於て急迫し居ることを聞いて、夫れを救はないと云ふのは義でないから、余は尙ほ私財がある故、夫れを君に融通してやろう』と直ちに十萬圓の手形を書いて雨敬に渡した、そうすると流石の雨敬も呆然として殆んど爲す所を知らないと云ふ有樣で、平身低頭百拜して其の厚意であることを深く謝して歸つた、左れば雨敬は直ちに其金を利用して忽ち商海に勝利を博するとが出來たので爲めに僅々三日を出でないで、正金十萬圓を調へ夫れを安田に償ふとが得たそうだが、平素の行動恰も傍若無人であつた雨敬も、此時から自然と安田善次郎に對し、心服する樣になつたさうだ。

一枚の原稿料二千五百圓は高過ぎる

幕府政躰が倒れて維新の昭代になると、彼の有名な日光の廟堂は將さに荒廢に傾いて來たのである、左れば坂東の義人有志は大に之を憂慮し保晃會と云ふものを起すことになつた、然して其の會と云ふものは彼の廟堂に大修繕を加へるのが目的である、又此の會を盛大にするのは德川の美術たる遺跡を永く後來に傳ふると共に、日光の美術が宏大であると云ふことを發揚することが任務なのである、斯の如き會であるから、大々的趣意書を作製りて將來に保存仕樣としたが文士の適任者がなかつた、すると或人が云ふのに福地源一郎先生の才筆を賴んだならば、好い文章が出來るであろうと議一決したから福地の宅を問ふて賴もうとした、所が櫻痴居士の言ふのに『夫

れは至極結構なことである、併しながら彼の日光の事に就ては餘程取調をしなければならんから、其原稿料は二千五百圓出して下さらんか』と依て發起人等は其の意に從がい諾したのである、定めて櫻痴先生のことであるから大文章が出來るのであらふと、其期を待つて居つた、期になると發起人等源一郎を訪ふたのである、すると彼の問ふのに『御約束の金は御持參下さつたか』と言ふので、直ちに二千五百圓の金を渡したのである、すると櫻痴居士は其の金を調べて見て、收めて後に渡したのは、菊版壹枚の原稿用紙であつた、其中を見ると僅かに十數行書てあるから、恰かも一字が二十圓に當ると云ふ有樣であつた、左れば發起人等は其の意外に驚き、只だ呆然として殆んど異域の地にあつて狐に詐まされた樣な姿であつた。

金堅と書立てられて閉口す

金子堅太郎男が東京商業會議所の會頭をして居つた時の話だが、墓參がてらに、郷里福岡に歸られた事がある、すると男は金子男爵で澄し込んで居ると、同地から發刊する福岡日報では、金堅金堅と無闇矢鱈に書き立てるので、男爵も大に弱り果てゝどうも郷里で斯う侮辱されては實に耐まらんから、金堅と呼捨てにするだけは止めて呉れぬかと、人を以て申込んだけれども、日報社では中々聞き入れない、毎日毎日金堅と書き立てるので、流石の男爵も之れには閉口したと見えて、恨めしげに福岡を立ち去つたといふ話である。

六時間の演說代は二千弗

理學博士の榮號を有し、動物學者を以て現今名聲を博して居る巽作佳吉が曾て歐米を漫遊した時の話であるが、其の初め米國ボストンに赴いた、そうすると同地の新聞記者等交々彼れを訪問して曰ふのには、東洋學者の所說を聽たならば定めて利益を得るのであると、續々來る者絕へぬ所と云ふ有樣であつた、左れば佳吉は其の訪問の煩に堪へぬ所から、そこで辭を設けて曰ふのには『余が所說は濫だりに他人に聽問することは許さない、故に若し君等が强ひて聽かうと欲するならば、宜しく相當の謝金を持參するがよい』と其の言を耳にした記者等は大に驚き去つて仕舞たのである、然して其翌日になつて當地の各新聞紙上に揭載した所を見ると、『日本國の理學博士

巽作佳吉は、己れの所說を公にする爲め、我々新聞記者に迄でも謝金を要求した、是れによつても日本の學術が如何に進步して居るか想像することが出來るのである、夫れ斯の如くであるとは唯だ驚くべきものである』と記載した、其後に彼れは轉じてニューヨルクに行つた、すると又例の如く同地の新聞記者輩は爭ふて彼れを訪問したのである所が彼の記者等は豫め謝金を出すから、其の演說を公開せよと請はれたので、彼れは辭することが出來ないから、直ちに承諾し六時間の動物論を試みたが、謝金と云ふて二千弗を與へられたのである、然るに彼れが其の當時は最も果敢なき境遇にありて、旅費も殆んと盡きて仕舞たと云ふ有樣であつたから、歸航するほかはないと思ふて居つた、所へ二千弗の謝金は彼の一身に入つたので、如何に喜ばしかつたかは解からないのである、殊に彼れが此の倖運

に際會したのも先にポストンに到着した時に於て一言を放つたから、其の辭柄は忽ち新聞紙上に掲載せられて、斯の如きことになつたのである、左れば此の僥倖を得ることが出來たので決して時ない種は生えないのであると、彼れは自ら喜のうちに歐洲を漫遊することが出來たと云ふて居る。

支那料理と鰕の講釋

人間は何んな者でも得意がある、又た自惚自慢も免かれないのであるが、彼の神鞭知常と云ふ男は上は星晨日月の大より下は世俗人情の微細に至るまで一として知らないことはないと云ふて、自稱自慢して居るのである、或時彼れは同士の人と共に支那の料理を食べようと言ふて往かれたことがあつた、すると鰕が出たのである、彼れは其の皮を剝きて喰べながら字と云ふものはどうも能く出來て居る者じやないか、此の鰕と云ふやつは斯の如く皮が段々となつて居るから、魚扁に段の字を書くのであると云ふた、そうすると其の傍らに居つた福本日南と云ふ男の言ふのには、夫れは間違つて居る、成る程鰕と云ふ字の旁りはカ（段）でダン（段）ではない然じながら

世間で云ふカヂ〳〵（鍛冶）はタンヤの誤りであると云ふ人があると言ふたので、流石才物の彼れ神鞭であるから、其直ちに語を轉じて滿洲料理談に及んで仕舞うたと云ふ話しがある。

意見行はれずして辭す

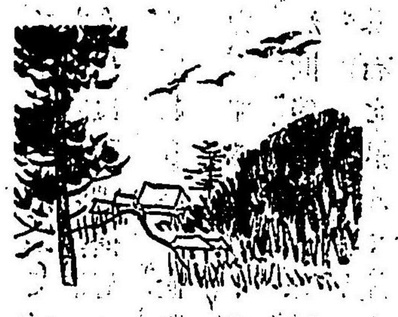
桐原捨三は實業界の卒先者として茲界の學業を修め、秘訣蘊奥を極めて居る、彼れは大阪の豪商五代友厚、鴻池善右衛門等が協議の上設立せられた、商業講習所の所長に聘せられた、所が僅々一ヶ年を出ないで校舍溢るゝ計りの盛大となつた、然るに彼れは北海道官有物拂下の事件及び關西貿易商會設立の主意に付き、五代と意見を異にした所から彼れは講習所に居るのを快よくないので、親ら縣廳に出頭し、講習所を大阪府廳に屬せしめ樣として建議を試みた、けれども其の議が叶はないので、彼れは轉じて當時發刊して居つた大坂新報社の記者となつて、豫て自己の腹心しある意見を其の紙上に掲載した、左れば彼の名聲は幾もなくして世人の耳に徹する樣になつ

たのである、凡そ實業者中其の人が多いのであるが、彼れの如き學識と卓見を有するものは現下又多しとしないのである。

貴樣は弱い癖に强事許り云ふて居る

伊藤博文の碁は甚だ上手であると云ふて賞する程ではないが、兎角非常に嗜きなのである、左れは所謂横好とても云のふであろう、今より四五年計り以前のことであるが、世間は一般に對外硬派抔と稱して、八釜敗時代であつた、すると會々或る政客が、伊藤侯を大磯の滄浪閣を訪問した、所が世談暫くして居ると碁盤が出たのである、左れは兩人相對して彼の碁石を掴んで連りに丁々とやつて居つた、そうすると何うも伊藤の方が少し强いと云ふ有樣であつたから、某政客は爲めに負けると云ふ傾きになつて來た、彼れ伊藤は政客に向ひ君は一目置かなければ駄目だと言ふた、すると某政客の言ふのには、是れは怪我負けであると强情を張つて、何うしても一目置くこ

とは出來ないと言ふた、其處で伊藤は大に立腹し聲荒らゝげて言ふのに、貴樣は弱い癖に強いことを計り言ふて居る、恰度今の對外硬派の樣な奴であると罵しつた、所が某政客は大笑して一目を置くことになつたそうだが、隨分面白い咄しである。



豹を買つて處分に困む

往年のはなしであるが、淺草花屋敷が財政整理をしたことがある、此時園主は盆栽を鬻ぎ又常に貯へ置きたる珍物を抽籤購買せしむるの趣向をした、すると岩崎彌之助は行つて多くの盆栽を購求し、大に其の整理を助け樣とした、所が例の抽籤によつて抽き當てた所の景物は何であるかと云ふのに、夫の陰險獰惡の豹殿が一頭與へられたのである、流石の彌之助も是れには驚ひて眉を顰めて曰ふのには「景物に事をかへて居る、豹殿とは恐れ入つた、本家では犬が好きで一疋四五百弗で買つたのもあるから、豹でも喜んで貰でやらう」と因て其の豹殿を本家に贈らうとした、すると本家に於ても亦た其の保管に困しむからと云ふて、容易に承知して呉れない、爲めに彌之

助困却惑ふて其の處直に心勞した、沈思默考久ふして曰ふのに「如意寶珠の至德を具へて寶を降らすの力はあれど、降るべき樣に仕向けねば降らない、左れば我れの厄介物である豹殿も、其の仕向け樣の如何に依つて、又た世を利するに難たくないのであらう」と云ふて終に其の豹殿を宮內省に献納した、所が宮內省に於ては其の豹を動物園に送つて保管したのである、すると其の豹殿は動物園中で一個の招牌となつて、參觀人山をなしたと云ふ話しがあるそうだ。

今になつては學問の用がない

加東德三が未だ幼少の時であつた、大坂の或る呉服店の丁稚となつたことがある、すると實に連宵百忙と云ふ有樣であつた、然るに彼れは僅かの暇を得て村田海石と云ふ人に讀書を受けたのであるが、爾來彼れは二十有餘年の久しきが間は投機家となり、或は實業家となり幾多浮沈の難に遭遇したのであるが、終に現今の如く盛名を博する樣になつた、然れども文字を知ること甚だ少いのである、恰度明治廿七年のことであるが、彼の三引將軍の羈を撤して專ら實業に從事したのである、すると多衆の紳商が曰ふのには「德三は商界の俊傑物であるけれども、惜ひ哉學識未だ足らない」と德三は此を聞いて或人に語つて曰ふのに「吾れ學問を仕樣と欲するならば易いの

である、然れども今日になつて其の用がない、而して我が資産は學識高才百人を養成するに餘りがある」と言はれたそうだ、又た彼れは銀行や、諸會社の重役に任ぜられて、其の劃策と論議する所は、往々人をして肯綮に當るのであるが、是れ皆な彼れが數年の實驗の然からしめた所である、左れば彼れの眼中に學者がなく又た學問するの無用であることを放言して居るさうだ。

活神樣大に苦しめらる

現任東京府知事の千家尊福男爵が、往年埼玉縣知事になつて赴任して行くと、同縣下の神主連は、彼れを指して活神樣の降來であると云ふて大に喜んで迎へたのであるが、夫れに反して僧徒共は大に不平を鳴らし色々と不穩の噂をしたのである、或日彼れ男爵は巡視の爲め縣下北足立郡へ出張した、すると恰も午食時になつたけれども、片田舍のことであれば立ち寄つて食事をする樣な家がなかつた、と云ふてもマサカ普通の民家へも寄る譯にも行かず困却して居つた、所が芝村に長德寺と云ふ曹洞宗の寺があるから、其寺へ行つて賴んで見たらよからうと云ふ人があつたので、是は僥倖であると思ふた、けれども聞く所に依れば穩かならぬ風說のある折柄であるし、殊

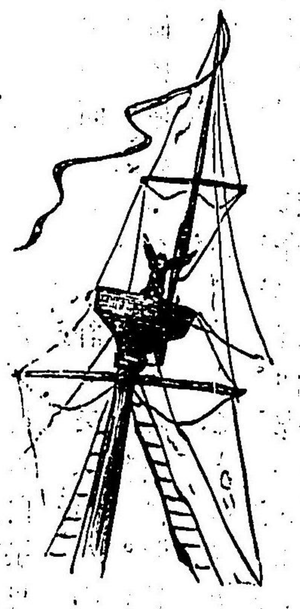
に彼の寺の住職と云ふ者は、武田文國と云ふて、勝海舟、山岡鐵舟居士等と最も交誼厚き友人であつて、有名な八釜敷氣質の僧であるから、男爵も多少躊躇の姿であつた、左れども事此に至りては如何ともすることが出來ないからと云ふて、恐る〳〵隨行員を派して賴んで見た、所が意外にも文國住持は直ちに承諾し、奥の上段の間を掃除して、男爵を其の座敷に案内し野菜料理ではあるけれども、貴顯を遇する本色である、禪宗の習いとて午餐の饗應非常に丁重に好過せられたので、餘りに意外の取扱いであるから、流石の千家男も小氣味惡く思ふたそうだ、然るに彼れが巡視をしてからと云ふものは、僧侶の不平の風説が段々無くなつて來たので、千家知事も初めて安堵の思をなし、專ら縣治に執掌することが出來たさうだ、左れば縣下の神主連は屠一層の喜びて、又た人民も此れが爲め自然に神

社と云ふ者は尊ばねばならんと云ふ風になつて來たのである、斯の如くであるから、如何なる僻陬の鄕社村社でも、樹木折る可らずとか、或は鳥魚捕ふ可からずとか云ふ制札が、新たに建てる樣になつたのは、眞に千家男爵の縣治上に於ける手腕であると云ふ話しだ。

三行半の厄介を如何せん

井上馨と云へば、現今滔々と聲名を博し、吾人の能く熟知する人物である、然して彼れの多情には頗る奇異の感を呈するのである、一體彼れは幾度か婦妻を轉換すること甚だしい、彼れが嘗て明治初年の頃であるが、或日大隈を其邸に訪ふた、會々貌色玉顔宛も美容の水を出るが如き美人が居つた、彼れは其の美人を見て意氣奔進禁ずることが出來ないで其來歷を大隈に問ふた、すると夫れは我が家に寄食して居るものである、而して其婦人は嘗つて中井弘に嫁したことがあると云ふた、彼れは之を聞いて然らば君媒妁となつて余の妻たらんことを請ふと、大隈は辭して曰ふのに、夫れは如何ん君が一寸惚て、必らず後日に至り三行半の厄介を生ずるのであると、井上

は決して然うではない、と天を指して誓願し、更らに確實を證する爲めに證文を容れて以て、其の婦人を娶つたと云ふ話しがある。



ソンナ弱い奴は大嫌いだ

人の心は十人十種であると能く俗界の通語であるが、實に人間と云ふ者は性質が皆な異つて居るのである、彼の白根專一と云ふ人物は仲々剛情であつて、又た面白いこと計り云ふ男なのである、彼れは毎年夏期になつて如何に熱からうが他人の樣に避暑であるなどと、西奔、東走、身を海山に避ける抔と云ふことはない、左れば多くの貴顯紳士が暑中に爲つて、やれ今年は何處の海水浴或は何處の温泉へなどと云ふを聞くと、獨り自ら笑つて居る、斯の如くであるから、或人が彼に向つて何故貴殿は避暑に御出にならんのであるかと問ふた、すると彼れの云ふのに、夏だらうか如何に熱つくても之れに敵することが出來ないで、逃げたり、避けたりする奴があるものか、

余はそんな弱いことは、大嫌な男であると云はれたそうだ。

日本の遣り方は鵜の樣である

早稲田の專門學校の講師として、世人に名を博して居る高田早苗は、鮎の演說が最とも自慢なのである、然して其の演說と云ふものを、明治二十八年の秋頃遣たのであるが、先づ其の概略を摘記して云ふたならば、「諸君よ諸君此頃の時節は鮎が捕れる時期なのである、去りながら此の鮎を捕るに就ては、人に依つて種々なる方法を爲すのである、例令ば、鈎で釣る人もあり、鈎を掛けて捕る人もある、又た或は網を打つて捕る人もあるが、其中で最も面白い奇妙な捕り方をするのは、美濃國の長良川抔にやつて居る彼の鵜飼と云ふて、鵜の首に輪を掛け之に綱を附けて、其の鵜を川に投ずるのである、すると彼の鵜は鮎を捕へて呑ふとすると、直に其の首輪を締めるので

鮎を吐き出すと云ふ工夫なのである、左れば世人は、彼の鵜の境遇を悲みて、詩であれ、歌であれ、彼れの事を憐んで言ふたことが澤山にあるのである、と斯の如く述べたならば聽衆の諸君は何だいちつとも面白くもない、鮎捕りの講釋などは聞きたくない、そんなことなら、誰れでも」知つて居ることであると呟ぶやく者がある、其時彼れは高聲にて「諸君よ我日本帝國の有樣を見たならば、實に鵜ではありませんが、折角呑込んだ所の遼東半島は首輪で締められて、又た吐き出さなくてはならなく爲つたとは、是れ詩にも歌にも悲しまれる境遇になりましたのである」と云ふて演說したので、此時聽衆は一勢に大喝采をしたそうだが、眞に高田の演說の如くである。

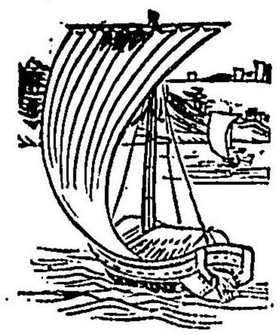
婚禮の略式を申込んで破談となる

小藤文次郎は現今理學博士として、隆名人に知られて居る、彼れは年三十有餘であつて、始めて或る人の世話で良家の娘を娶らんとしたのである、約既に成つて愈々結婚の式を擧げようとした、すると其の婚儀の煩悶であることを見て、一切之を略式として太古時代の無爲を以てやらうとした、所が妻の親父は其の不可であることを憤り、斯の如き亂雜な儀式を行ふなれば、迚も余等の娘は呉れる譯にはいかないと、終に破談となつたのである、すると彼れは之を聞いて「夫れは最も妙だ」と言ふたそうだ。

書物賣上代の持逃げを極め込む

幕末の頃であつたが、高橋新吉、前田献吉等の有志が相談して何か面白い書物を編纂して、一金儲をやらうといふ事になつた、當時は幕府で發刊した英和對譯袖珍字書といふものがあつて、外に結構な辭書もなかつたから、こいつは一番字引を編纂するのが上策だと、二人は遙々上海にまで行て漸く出來たのが、例の薩摩字引といふやつだ、偖其書物の代價は何程かと聞けば、十二兩で實費は僅かに三兩も要らないのであるから、差引一冊で九兩も儲かる、そこで上海から三千部だけ日本に送つて來た、此時前田献吉の正名が、乃公が日本に持つて行て販賣方一切を引受けやうと、夫れから江戸に上つて一生懸命に賣販て終まつたのは誠に結構だが、其賣上金を殘らず

引さらつて、瓢然と佛蘭西に逃て行つたのである、跡に殘された高橋等は開いた口も塞がらない、只々呆れた姿であつた、前田は屁とも思はず洋行して、其金で學問したとは、中々喰へぬ男であつた。



外國紳士として優遇せらる

今より十六七年以前のことであつたが、恰かも矢野文雄が、報知新聞の主筆であつた時に、英國へ洋航せられたのである、すると或日同國のチヤンバアレーンの撰擧區であるバーミンガムと稱する所に遊びに行つた、所が恰度チヤンの報告演說會を開かれたので、彼れは其の演說の傍聽に行つたのである、すると其場內の椅子は最早や悉く人を以て充たされたから、其一番後の方に立て居つたが、人は黑山の樣になつて居るので、彼れは僅かに隙を窺がひ覗かうとしたけれども、何分背の高かひ英國人ばかりてあるから、日本でこそ大軀男であつたけれども如何もすることが出來ないで立て居つた、すると聽集の人が彼の姿を見て忽ち外國の紳士が來たと云ふて叫ぶも

のがあつたから、多衆の人は直ぐに道を明けて呉れた、彼れは椅子の列べてある所まで行くことが出來たので喜んで居ると、此時は未だ演說が始まらなかつた時であつた、間もなく演壇の方から、幹事とも云ふべき人がやつて來て、彼の傍へ寄つて、貴君此方へ御出でなさいと、案内されて演壇の後方に設けてある特別の椅子席に列せられ、外國紳士々々と呼れて、非常に優待の意を表せられたのであつたが、彼れは常に人に向つて我國でも斯ふ云ふ風に、外國の紳士に對しては待遇する樣にしたいものであると、云はれて居る。

あらマー旦那さんですか

文科大學、國學院等の講師と爲つて、頗る名聲を博した文學士三上參次氏は時時異變な行動をしたのである、夫れは毎日曉を侵して寢所を起き出て、一時間つゝ薪を割るを例とした、其の熱心と耐忍とは未だ曾て寒暑の故を以て業を廢した事がなかつた、會々彼れの家で新參の僕婢を雇入れた、然るに雇人は未だ家内の事情に通じない爲め、或朝、丁丁と薪を割る如き響の耳朶に徹したので、是れは寢過したかと思つて、慌てゝ起き出て雨戸を開いて庭前を窺ひ見た、すると簑笠を着けた一人の男が、降雪飄々肌を徹する寒風の間にあつて薪を割ることと頻りであつた、此處に於て下婢の言ふのには、「薪屋さん御早ふ」と、彼の男は後方を顧みて答へて云ふのに「まだ五

時前へだ、そんなに早く起きないでも宜いよ」と下婢は之を熟視し驚いて「あらまあ旦那樣ですか」と言ふたことがある、以て彼れの熱心と勤勉であつたことは、測知することが出來るのである。

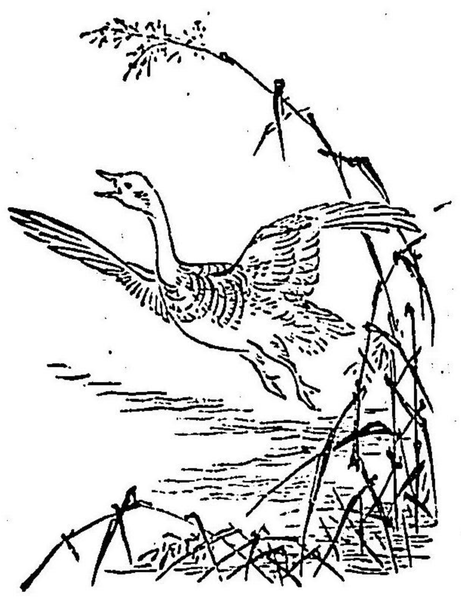
余は筆硯の奴隷に非ず

現下我國第一の書家として又た詩作家として其の名世人に知られて居るのは巖谷一六居士である、彼れが曾つて甲府に遊んだとき或る旅館に投宿した、すると當時、其地の某警部長が平素愛吟して居つた所の詩一絶を使に托して贈り、以て其揮毫を依頼したのである、所が一六は其詩を見て大に憤つて云ふのには、他人の詩を贈つて之れが書を求むる抔とは、無禮千萬是より甚たしき者はない、と、滿面に朱色を放つた、余を以て筆硯の奴隷視するのであると、頑として其意に應ぜず紙を染めなかつたのである、爲めに彼の使者は大に驚愕し、呆然として歸つたと云ふ話である。

起立ではない着手です

大三輪長兵衛は大坂府選出の代議士で、關西の實業界を代表して居るの人物と申しても宜しい、殊に彼れは雞林八道に迄も名聲を知られ、同國の皇帝よりは特別の寵愛を受け、正二品に叙せられた、偖て先頃の事であるが、政友會の大坂支部大會を同地の岸松館で開いた、すると君は議長に選ばれたので、夫れから直ぐ議事を開くことになつて、議長席に就かれた、議長の大三輪は一同に向ひ「贊成の諸君は起立をなさい」と呼んだものだから、贊成組の黨員は手を擧げて居たが「起立するのですか」と反問したら、君は之を聞て答へて「イヤ起立ではない、着手です」と云つたので、滿場の會員はどつと噴き出す許りに笑つて仕舞つた、癪がて會議が濟んで、今度は

宴會に移ると、君は一場の挨拶をしたが、又々失敗した、「不肖長兵衛も別席の榮を得まして」と全く眞白面に述べたので、會堂も破れん許りの騒ざであつたさうだが、君自自も生れてから、こんな失策をした事はなかつたと云ふて居る。



勅任官にならうとは思はない

今より三四年前の事であるが、長谷塲純孝が勅任參事官に任ぜらるゝと云ふ風説が、新聞に雜誌に且つは政論家の間に起つた、すると君の友人が訪問して風説の眞僞を聞くと、君答へて曰ふのに、新聞紙上には種々の辭令書を頂載するが、余は進て勅參になろうなとゝは思はない、何もソウ急にアセラなくつても機運は自然と向つて來る、改革のと騒ぐが人生感意氣、功名誰復論の風にならなければ、決して眞正の改革は出來ないと、然かも意氣昂然と當世の時弊を痛論されたので、客も取持ち無沙汰で歸つたといふ話である。

國家事業と聞て一杯喰せらる

相塲師で大金を儲けたと云ふたならは、世人は濱野茂であることを知るである、彼れは益々奇策に乘して懷中温くなつて來た、すると實業に身を轉じやうと欲した、けれとも實業家となるには先つ政事の大體に通曉しなければ如何などと考へ、夫れから乃ち巨萬の運動費を遣つて漸く衆議院議員の選擧に當選することが出來たのである、所で偶々雨宮敬次郎は自分が鑄鐵會社を持て餘して居ると云ふ事を知らないから、私に濱野をして其の後任たらんことを勸めた、然れども彼れは容易に應じなかつたのである、すると敬次郎は濱野を新宿の家に呼き、徐ろに問ふには「君は生涯相塲師を以て此の世を葬す積りか、又た何にか國家の爲めになる事業を起す積りはない

か」と云はれた、彼れは其の聲に應じて揚々と答へて曰ふのには、私しだつて生涯相場師を以て此世を暮す積りはない、何にか國家の爲めになる事業を起し、盡して見たいと思へはこそ衆議院議員にも爲つたのだ」と開ひて雨宮は私に喜んで夫れは實に結構だ、と忽ち現今製鐵事業の國家に有益であるとを說き以て其の困厄を濱野に嫁したのである、すると日ならずして鐵管の疑獄事件が出體した、けれとも、濱野は幸ひにして保釋を得て我が家に歸ることが出來たのてあるが、後ち彼れは長大息して曰ふのに「私しも國益論で不細工な雨宮の口車に乘せられたが、矢つ張り手練た元の相場師がよいと言ふて、私かに例の空米相場をやつて居るそうた。

肉體は退場さしても精神は出來ない

新潟新聞の主筆を罷めて來てから、益々世に知られて來た、彼の尾崎行雄も一度文部の大臣と云ふ椅子を占めたので、彼れの氣象も大分確かりしたけれども、夫れ迄の間と云ふものは實に靑かつた、殊に彼れが洋行をして歸つて來た當時の有樣は、丸てバーチルを氣取つてグラッドストン抔は糞味噌と惡く言ふて居つた、或時彼れが衆議院の席上で卓を叩いて議長の宣告に反抗を試みて見たことがある、夫れが爲めに遂に退場を命ぜられたのであるが、其時彼れが云ふのに、余が肉體は退場さすることが出來ふけれども、此の尾崎行雄の精神は決して退場さすることは出來まいと氣炯萬丈であつた、此等は丁度バーチルの傳記を繙いて見ると實に其の通りなのてある、然

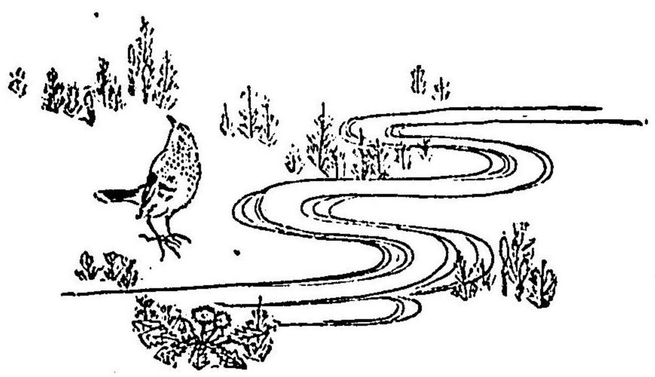
して又た彼れ尾崎は英國の下院に臨んで實際を傍聽したのであるから、パーチルが議場を退場された所を目擊したのである、左ればパーチルが一度退場せられ失敗してからと云ふ者は彼れ尾崎も段々パーチルの事は口に出さなくなつたのであるが、夫れ迄と云ふものは殆んとパーチルと云ふても宜しい有樣であつた。

深く其德に感ず

樺山伯が或時自由黨の江原素六と相會した、其時君に某縣の知事になつては如何かと勸めると、君の言ふのに余は政事に身を委ねて居るの日は尙ほ淺いが、他には十年も二十年も一日の如く東奔西走し殊に其中には家產を蕩盡して終つて衣食だに窮した人さへあるのである、伯が若し人を任用しようとするの精神があるなれば宜しく此かる人を擧げて貰ひ度いのである、と誠意を以て答へたさうだ、之を聞た伯は私かに君の德を感じて再び任官の事を勸めなかつたと云ふ話である。

定めて咽喉の瀬を流れたであらう

兒島惟謙は件て神田の神保町に居を搆へて住んでた、會々食客があつて能く彼れに事て居たのである、然れども彼れは非常に嚴格であつたから、若しも食客が瑣事の過誤失策があれば大に罵倒し恰も傍若無人の感を呈するのである、而して彼れ或日食客を叱咤頻りであつた、所が書生は其反動力を惹起し一策を案出した、蓋し惟謙の隙を窺ひ豫て密ふ所の鷄を屠殺して食し其の形跡を現はれない樣にして居つた、すると後日に至り、彼れは鷄の居らざるを怪み食客に問ふたのである、すると食客の云ふのには彼の鷄は數日前井中に墮落して死んだのである、爲めに之を水道橋の下に投棄したと答へた、彼れは之を聞いて大笑して言ふのに、ナーニ定めて咽喉の瀬を流れ



たのであらふ、と書生其の言に恐れ且つ寛大なるに服したと云ふ話だ。

葡萄酒の見本百樽とは恐れ入る

蜂印香竄葡萄酒を製造して、東京の醸造家中隆々世人に知られて居る者は、誰れであらうか、即ち神谷傳兵衛なのである、往年のことであるが、彼れは此業に於て未だ充分の研究がなかつた、爲めに自分の子息をして欧米に渡航せしめ、一意專心彼の子息は百難萬苦を排して親しく彼地の醸造法を研究したのである、此れが爲め事業の發達は勿論であるけれども、其他幾多の利益を與へられて歸朝したのである、所が彼れは忽ち葡萄園を設けて國益を圖ろうと欲して苦心された、けれども好土地がない爲め百方心痛せられた末、遂に常陸の女化原と云ふ所を選び、明治三十一年頃彼地の開墾をなし數百町歩の葡萄園を開くことが出來たのである、左れば益々斯業に力を添へ盛かんに擴張怠らないのであつた、斯の如く業務が盛大になつて來ると製造と販賣とを兼ぬることが出來ない、又た兼業しては不利益なのである事を認めたから、彼れは即ち近藤利兵衛をして一手販賣を托した、左れば安りに他よりの注文には應じないのである、近頃のことであるが佛國のボルドーの或る農民が生葡萄酒百樽（百二十石で此價は四千五百圓）を傳兵衛の所に送附になつて尚ほ夫れに書面を添へてあつた、其文の意味は「君は葡萄酒の醸造に熱心であつて、先に二人の子供を遠く海外に派出させ、其の醸造法を研究せしめたと云ふことを聞たが、我輩も亦た此業に鞅掌して居るのである此程生葡萄酒を醸して新たに得た所の良品甚だ少なくないのであるから、是れは見本のしるしに先づ百樽を呈するのである、將來も永く同業の交誼を深くしましよう」との文意であつた、彼れ傳兵衛

は是れを見て驚いたのである、其後になつて或人に語つて曰ふのには、流石に佛蘭西の百姓はえらいものだ、百樽の見本とは意外ではありませんか、乃公なんか一ダース（四圓五十錢）位の見本を遣るのが關の山だ、實に歐米の人に、此な咄しをしたならば赤面するであらうよ。

東宮亮を驚かす

中洲三島毅が東宮亮を驚かしたことがある、夫れは往年碩儒者と呼ばれた、川田甕江とは、彼は最も親密の朋友であつたのであるが、甕江は當時東宮侍讀の任を帶びて居たが、幾何もならないで歿した、すると、宮中に於ては、東宮侍讀の後任者の選擇をすることになつて、東宮亮が其の內命を奉じたのである、所が東宮亮は中洲を後任たらしめようとして、君の邸を訪ひ內意を通じて曰ふのには、先生若し諾する意がないなれば、已を得ないから他に其の人を求むるのであると、中洲は此の一言を耳にすると、ムッとして怒氣を含み、答へて言ふのに、不肖毅の如き者が辱なくも此の大命を賜はるは、眞に一生の榮譽、無上の幸福である、左れば聖恩の萬分一に報じなければ

ならん、然し足下の話の如くであれば、毅一人に殊命の下つたのに非らず、若し毅之を諾したならば、毅にても善いと爲すのであらう、果たして斯の如くならば、迚も淺學短才の毅などは何うして能く其の重大な任務を擔ふに足らんのであると言放つた、東宮亮は大に君の言に感激して歸つた、すると君は其の翌日になると突然に東宮御用掛を命ぜられたのであるが、彼れは平素最も緻密な腦裡を以て居るのであるから、猥りに放言する者を見ると忽ち揚足を取つて返答する

と云ふ話である。

貴様は何故乃公を殺さなかつた

現今帝國黨の首領となつて名聲隆々として世人に知られて居る佐々友房が西南の役が濟んだ時であつたが品川彌二郎と大議論をやらかして遂に遣り込めた事がある、夫れは西南の戰爭が始まると彼れ品川は然も太政官の大書記官と云ふ勢で熊本へ行つたのである、すると當時の縣令であつた富岡敬明と一處になつて熊本の城下を去る三里計の御船町と稱する所に其の難を逃れたのであるが、此時は池邊吉十郎が大隊長であつて熊本に蜂起した賊軍の中であるが何でも官員を第一着に殺して仕舞はなければ如何ないと云ふ評議が起つたのである、すると佐々は其時丁度賊軍の中隊長であるから其謀議に加はつたけれ共佐々は夫れは如何と云ふて極力其の説と反對したので

ある、夫れが爲めに彼の官員殺しは止めにすることになつた、段々戰爭も濟んで平穩と云ふ空になつて來た佐々は捕はれた、すると品川の言ふのには、何故戰爭中に乃公を殺さなかつたと問ふた此時佐々は「御前は少々吏才があるから己れが望みを遂げた時には戸長にして使つてやる積りぢやつた」と答へたので、流石の品川も二言の句を續けることが出來なかつたと云ふが此の答辯を聞いたならば、佐々も中々面白い人物の樣であるけれども、後になつてから品川に降參して大明神樣と崇拜したので彼れの度量のある上皮が剝げて仕舞つたのである、夫れから賊軍に加つて働いた佐々も終に十年の懲役となつて牢屋に呻吟したのであるが其の當時面白いことがある、彼れが入牢になると終日默然として座つた儘少しも動かない、時に便所へ行くと恰度湯菜に鹽と云ふ樣な風であつて、歩くにも丸で蛾

の歩むようであつたから、同囚の者には定めて彼人は病氣であるだらうかと心配して聞いて見た、すると佐々の言ふのには、何にそうでない、此の牢の中に這つて居ると腹が減つて堪らない其れを活潑運動をしたり、大きな聲を放つて話をすると、猶ほ一層腹が減るからだと、如何にも悲しそうな聲で言はれたと云ふ咄しがある。

背後から鹽を撒かれて自若たり

薩摩の一武士である高島鞆之助が、往年侍從に任ぜられた事がある、全躰此男は容貌も餘り立派でなく言語や動作も優美でない所から、同列の侍從は君の參内したのを見て、汚はしい奴だといふて、背後から鹽を撒布した、君は之を知つたから堪まらない、非常に腹を立てゝアクヤ彼奴等が頭を打ち擲くらうとしたが、いヤ〳〵短氣は損氣と云ふ事があると、氣を取り直しては一向に頓着せない風を見せて、少しも言語に訴へなかつたのである、後君が志を得て、立派な地位に立つてから、或人に告げて言ふのに、「乃公があの時に怒つて鐵拳を試みたなれば、如何しても今日の地位に昇る事は出來なかつたのである」と物語られたさうだ、思へば堅忍は實に出世の種子である。

オイ少し用心せよ

政友會に異才を有し策士連と呼れて、縱横に斬り廻して居る林有造は、恰度井上伯が大臣であつた時に條約改正を主張したのを林は之に反對をして三大建白書を掴んで上京したのであるが、先づ黑田の邸を三田に訪ふた、すると其の所へ松方伯がやつて來たので、黑田は松方に向かひ林の建白書の話をした、所が松方は僕はそんなことは更らに知らぬと云ふたのである、黑田侯は、眞赤になつて怒つて言ふのには彼の有名な林有造の建白書を知らぬ樣なことでは内閣大臣が務まるかと大聲を發して怒鳴つた、左れば松方は何とも言ことが出來ないで默然として居つた、すると間もなく松方は宅へ歸つた夫れから酒が出たので黑田も林も非常に酩酊したのである、すると

林は歸へらうとして、玄關まで出て來ると、黒田は後から出し抜けにやつて來て林の首を締めたので林は吃驚して此の黒田め又た亂暴するのか、よし夫れなら此方でも負けず喧嘩をやるぞと云つた、すると黒田は急に林の耳に口を附け「用心せいよ」と云ふて手を放したが、林は何の事であるか解らないで宿へ歸つて來たのである、そうすると二三日程たつと果して保安條例が飛び出したので、林は其の時拍手して、ハア成程そうであつたかと氣がついて、黒田に言はれた一言に感服したことがあると云ふて居るそうだ。

強情を以てグ氏に會す

人には各々長所とする所がある、そこで何事にも熱心で押の強と云へば望月小太郎などは其一人である、彼れが先年英國へ遣つて行くと、同國の有名な大政治家グラットストオン氏を訪問して面會しやうとしたことがある、すると彼れ大政治家は容易に日本のハイカラ輩抔に面會する人物でない、既に山縣侯爵が、英國へ行つた時面會を求めたけれども、何しても會ふことが出來なかつた位であるから、望月小太郎等が面會することの出來ないのは當然だ、然るに彼れは例の強情一點な男であるから、何度となく訪問したのである、所が會ふことが出來なかつた、すると彼れは一計を策し少氏の親友某の門を叩いて說き付け、遂に少氏に面會することが出來たのである、

彼れの押しの強きこと斯の如くであるから、終へには其の目的を達するとが出來た、間もなく彼れが歸國すると直ちに山縣侯爵を其邸に訪問し先つ自慢の鼻を高くして云ふのには、侯の會ふことが出來なかつたゞ氏に、余は面會して己れの意見を吐露し、揚々歸つて來たのであるから、之を以て見るも余の技倆を測知することが出來るのであると、得意の法螺を吹いたと云ふ咄しがある。

昔は小學教員今は法相

明治三年の九月であつたが、今の法相清浦奎吾は一貧書生の身を以て埼玉縣の浦和へ遣つて行つた、其の當時何の目的も無くて行つたのであるから、忽ち糊口の危に迫つたので其時縣會議長である星野平兵衛の宅を叩ひて寄寓することが出來た、すると星野や其他の有志連が、彼れを斡旋して、北足立郡小針村大字大針の或家に居候に遣て、傍ら村内の若者に日本外史抔を敎示して居つたが、六十日許で止めて仕舞て、再び浦和に逃げて來たものだから、此度は現今浦和停車場附近の某家の二階六疊の一間を借り受けて、其所に居候することになつた、けれども何の業務もないから毎日ぶら〳〵光陰を送つて居た、所が北足立郡風渡村の小學敎員に雇はれることになる

と、其の當時の名前は大助敬と云ふ大した名であつたが、月給僅に五圓しか取れない、さうする内、間もなく浦和町に開成校（今の師範學校の如き性質のもの）と云ふものがあつて、彼は其校に榮轉して月給十圓と昇給したのである、さあ此校に入ると非常に好評判であつたから、忽ち縣の權小屬に轉して、月給二十五圓と爲つたのである、夫れから明治八年に中屬と昇進して四十圓の月給を取つた、同年十一月東京の聖堂に於て各府縣の學務主任會議が開かれたので、其の時清浦も四十圓取りの學務主任であつたから、其會に出席することが出來たので、始めて彼れの手腕を顯して、各府縣の學務委員を風靡することが得た、是れより彼の名は世人に、知らるゝ樣になつたのである。

君もモー生命か無いよ

或時小山久之助と犬養の二人が卓を圍んで話して居つた末小山は犬養に向ひ、僕は全躰酒の味が分らない、夫れだからしてな酒でも關はず飲むが、思へば今迄飲だヤツは水とアルコールの混合したものと見えて大いに躰を痛めたと言ひ出すと、犬養は小山に曰く夫れは酒の爲めでない、年のセイだソンナ樣子では死も近いぜ、ドーダ政治家などは廢て終まつて又小角力でもヤツたら善からう、モー角力も出來んなどゝゆふ樣では、愈々近々の死と定まつたに相違ない、小山曰く僕は近頃佛蘭西の歴史を飜譯して居るが、どうして中々面白い、立憲政治の初は何國でも同じ事で、日本ばかりでもない樣だ、と一番吹き立てる、犬養曰くソイツは實に驚き入つた飜譯をヤルな

どとは非常の勉強家だ、君もソロ〳〵本心に立ち還へりかけたな、と二人相見て暫し笑つた事がある、今や小山は世に無き人となつた、木堂も又如何に感ずるであらう。

諸君の鼻に異狀はないか

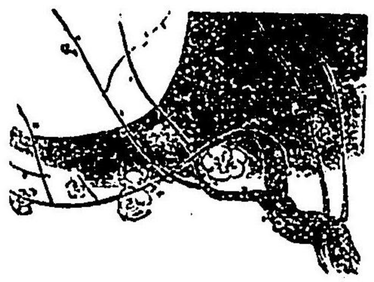
松田正久が佛蘭西へ行つた時の話であるが、馬塞から滊車に乘り出すと、先生俄かに便意を催ほして來たので、室内を彼方此方と見廻つて便所を索したけれども、生憎其室には便所が設けてなかつた、止むを得ない所から耐へて居たが、しまいに遣り切れなくなつて、覺へず一塊をツボンに落した、先生ヤー之れは仕舞たと思つたけれども、如何仕樣もない、エー其儘にして置けと言つて居るうちに、滊車は巴里の停車場に着いた、そこでさあ之れが知れてば大變だと、暫らく考へたが、何でも先んずれば人を制すと云ふ事があるから、此方から一番先へ豫防線を張らうと、出迎の友人に向つて挨拶ソコ〳〵で「諸君、何か諸君の鼻に異狀はないか」と切り出したが、其

後は如何あつたらう。

碁自慢は後に失策

柴原和が嘗に千葉縣の知事をして居た頃は、中々の碁好きで、毎日〳〵屬僚を捕まへては打つたが、誰れでも渠に勝つものがなかつたので、柴原も忽ち天狗になつて屬官等に向ひ、官海には尾崎忠治といふ剛の者がある、乃公はまだ此男とは對局して見ぬが、別に恐れる程にも及ぶまい、況して民間の碁客なぞは、何んな者が來ても戰さにやならないと云つて、大自慢は殆んど當ることが出來なかつた、所が其内に君が民間に下つて實業界に身を投ずると、碁の相敵がど〳〵來たが、何れも君より優手であるので、君も碁客の某に向つて「ドウモ民間には碁客に富んで居るものが多い、乃公も夫れならば早く役人を廢めて仕舞つて碁を學ぶのであつた」と物語ると、傍

に居たのが恭の大先生中川龜三郎であつた、君は更らに柴原に向つて「貴様が恭の長者にならうと思ふたらば、何も民間に下つて修業なさるにも及びますまい、若し一度なりとも總理大臣の倚子を占めた時には、土屋巖崎などの名手でも、きつと勝を貴様に讓づるでありましやう」と言はれたので、流石の柴原にも之れにはグーの聲も出なかつたさうだ。



船中に角力を試みて外人を驚かす

嘉納塾と云ふ者を設けて、專ら青年に柔術を敎えて居る嘉納治五郎は、膽力家を以て世人に知られて居るのである、彼れが往年歐洲へ洋航して歸つて來る時、乘船すると、船中には支那人も居れば、英國人も居る、獨逸、佛蘭西、露西亞の各國人種が居つたのである、すると力自慢で終いに角觝が始まつた、所が遂に露西亞人某が勝利を得たので、彼れは得意の鼻を高くし、幹大肥滿の躰軀と力量の己に、及ぶ者なきを誇而に言い放つたのである、すると傍らに見て居つた嘉納は彼の傍若無人の露西亞人に對し、成程見る所に依れば貴君は體格も好し、非常な剛力であるが、此船中には未だ君より一層の强力の者がある、余の如き此の薄弱なる體格を以て見ごとに君を

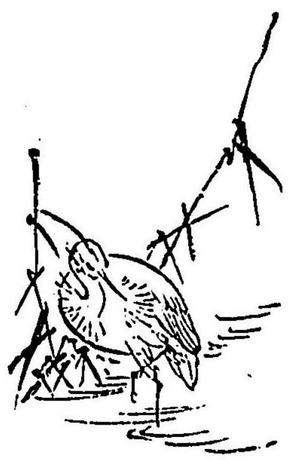
拋け倒すべし、先づ試み見んと言ふた、彼の露西亞人は此を聞いて、大喝し何の小癪な倭兒の一言、いでや一勝負爲さんと、二人は直ちに素裸體となつて角觝を始めたのである、すると船客の多數は何れも甲板上に顯はれ瞳を張つて居ると、兩人互に勇氣を鼓舞して取組んだかと思ふと、嘉納はやーと言ふ一聲と共に、彼の露西亞人を七八間も前に眞倒さまに拋げ付けたので、見物の多數は其の意外の勝利に、拍手喝采の聲は船體を顚す計の有樣であつた、左れば船中の强力は遂に嘉納に歸したのである、すると彼の無禮高慢の露西亞人も流石に一言の云ふ可き所なく、見るかげもなき姿となつたそうだ。

君少し遠慮し給へ

臺灣民政局長となつて居る後藤新平は、世人の知る如く異才のある人物なのである、彼が先年打狗に行た時、磯貝靜藏か新平に向つて言ふのには、君の熱心なるには實に感心するのである、けれども餘りやり過ぐると總督を凌駕する樣になると言はれるから、少し遠慮したらどうであるかと云ふたので、彼れ新平は眞赤になつて怒り出したので、磯貝も殆ど持てあまし眞面目になつて謝したそうだ、聞く所に依れば彼れ兩人共は睨合の姿であつて、彼奴が辭職すれば宜いがと云ふ有樣なのであるから、平常彼兩人は烱々たる眼光を放つて居るのであるが、兩人共用心をして居るから仲々其手は喰はぬので、依然として居ることが出來るのであるそうだ。

赤兒を貰受けて訴訟を解く

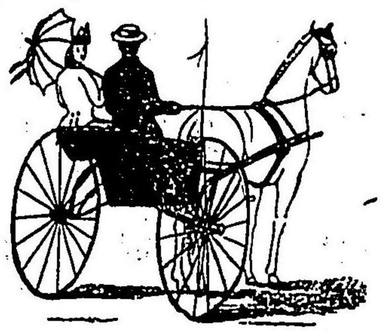
遂此頃の事であるが、埼玉縣の或る農夫が嫁を貰た、所が三四月過ぎると婿殿は嫁が氣に入らないと云ふて、放蕩を始めたので、止むを得ず離縁することになつて、一方では嫁を引取つて終まうと、間もなく腹が肥れて來た、愈々姙娠と定まつたから種々と養生させた、サア其中に臨月となつて女子を分娩したので、今度は父親の認知問題が起つて、母親の方では婚姻中に生れたものであるから此子は全く前夫の子であると主張し、一方ではイヤ左樣ではないと強情張つた上句は、裁判所に訴へる事となつて、辯護士立川雲平を訪ひ訴訟事件を頼むことになつた、すると立川の曰ふのに、全體此事件は雙方で子供を引取る事が出來ない、言はゝ子供はいらぬと主張するのである、して見と此子供さい無けらねば、何も裁判所を煩はすにも及ばないのであらうと問ふた時、本人は立川に向ひ、先生の仰せらるゝ通であると答たので、立川は更らに、夫れでは乃公が此赤子を貰ふて、養育するから裁判事は止たら宜いじやないか、と言はれたので、本人も此言に感泣し、何分御願ひ申しますと云ふて、歸られた、其後立川は例の赤子を引取つて自分の養女となし、事は親和なれといふ所から、名をお和と命じたと云ふ話である。



燒芋代の催促に遭ふて窮す

伊東男が、今の伯爵佐々木高行の所に食客をして居た時だが、食客仲間には末松謙澄男なども見えた、二人が伯の信用で近所の燒芋屋から盛んに芋を取つて食つた、所が何時の間にか勘定が溜まつて芋屋が催促に來た、すると巳代治先生之を見て、忽ち何れへか隱れて終まつた、只殘つて居た末松は色々と芋屋に談判した揚句に、とふ〳〵追ひ返へして、ポツト一息吐いて居ると、君は何處からか莞爾と笑ひながら歸つて來たので、末松は伊東に向つて「オイ芋屋に懸合はれて酷い目に遭つた」と曰ふと、伊東はさも眞面目返つて「芋屋が來たのか、構ふことはないから、ウンと叱り飛ばして遣れば好いのに」と挨拶すると末松の曰ふのに「君ソーは行かないよ借りて

食つたのだからナー」とは、書生時代は誰れしも同じ樣である。



十四歳にして碑文を作る

明治初年に於て櫻痴居士と云ふたら、文壇界の雄將と尊められて、殆んど飛ぶ鳥も落す樣な勢力を持つて居つた、天才は恐るべきもので、幼年の時から神童と賞められたのである、君が丁度十四歳の時に漢人の某が崎陽と申す所で、有志と謀つて墳墓を港内に建ることになつた、そこで碑文は誰れに書て貰ふといふ議が出たので、種々相談の末は日支の多くの文士に請ふて、其中の最も華士を拔擢して、碑石に刻んだはうが宜いと定まつた、福地源一郎先生之を聽き込んだから默つて居られない、よし乃公も一番筆を揮つてやつて見やうと、夫れから一篇の文章を認めた、すると君の父親が知つて、夫れは途方もない、此樣な事は子供が戯れにする技でない、御前の樣な

者がそんな仕事を望んでも無益であるから、思ひ切れと意見したが、先生中々承知しないので、父親も止むなしに許した、君は喜んで例の文章を持つて行つて見せると、君の文章は一番能く出來て居たので、多くの者は驚いて終まつた、早速君のを拔いて彼の碑面に彫刻した、さあ之れから櫻痴の名が世間に持囃された譯である。

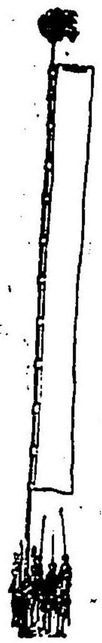
父は神聖にして犯す可からず

田中翁が若い時に自家の憲法を定めた、其憲法は四ヶ條からなつて居つたのである、そこで第一條は借債は食事所に貼付けて家内一同の記憶を有する事、第二條は向三ヶ年間在來の雜品を利用し容易に新規の物品を購求せざる事、第三條は日曜日には家内一同休息する事、第四條は新たなる金錢の支出を要する事あらば家族一同の協議を經べき事ださうであつた、丁度或日の事翁は某酒屋へ營業の手傳ひに行くことになつたので、決して憲法に違反する樣なことをしては宜けない、と云つて自家を出たのである、暫らく經つと、妻君が木綿羽織と前垂とを拵へて、例の酒屋に持つて行き、主の田中翁に渡さうとした、翁は之を見ると、非常に立腹して曰ふのに、此事實

は確かに田中家の憲法第四條に違反するものだと、直に妻君を罰して實家に追ひ遣つて仕舞つたが、三日程過ぎると親許から特に詫びて來たので、赦免して再び妻君を宅に歸へした、所が其後自宅に歸つて見ると、今度は疊が新らしくなつて居る、翁は又怒り出して法を破ぶる者は誰れかと尋ねた末、疊を取り換へたのは父の富藏だといふので、流石の翁も之れには閉口し、暫時考へて居たが「父は神聖にして犯すべからずだ」と云つて已んで仕舞つた、夫れより憲法も中止したといふ話である。

盆栽を枯らして資本は空

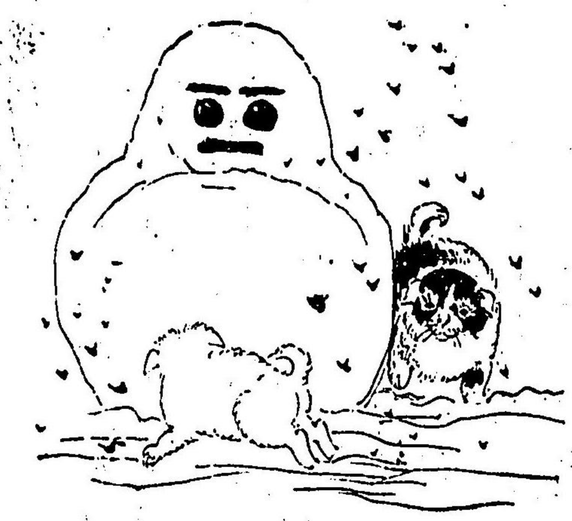
笠原惠君が或時何か金儲はあるまいかと考へて居つたが、ふと思ひ付たのが盆栽で、何でも之れを歐洲へ持つて行つたら無儲かるだらうと、夫れから種々の種類を澤山買ひ込んだが、殆んど船へ滿載といふ有樣で、愈々横濱を出帆したのである、軈て五十日餘を經つて英國倫敦へ着いた、さあ之れから例の盆栽を降ろして金儲に着手するのだと喜んで居つたが、船から陸に出して見ると、哀はれなことには大抵枯れて仕舞つたので、金儲けどころか原資までも損失なつたといふ話であるが、恰度早川の金魚と好一對である。



放言壯語の後は放逐

恰度十六年の六月であつたが、井の角將軍が金晩植の周旋で朝鮮政府の雇となつたことがある、其時君は官報の編輯主任を命ぜられた、所が其十一月に博文局で漢城旬報と云ふものを發行すると、君は町の或る藥店の主人が殺されたのを聞て、其の殺害人は支那人であるといふて、例の漢城旬報に書き立てたから堪らない、支那の彼奴も怒り出して、京城に居る兵隊からは、そんな事はあるものかと故障を持ち出し、本國の李鴻章よりは朝鮮政府に書面を送つて詰問をするなど、中々八釜敷なつて來たので、政府の役人が之れには閉口して終まつた、然し其分にして居た時は何んな事を支那政府から持ち込まれるか、分からないと云つて、結局君の雇を解いて、直ぐと日

本に逃げ返させたとは、とんだ失敗であつた。



附髯の紳士と飛んだ仕損ひ

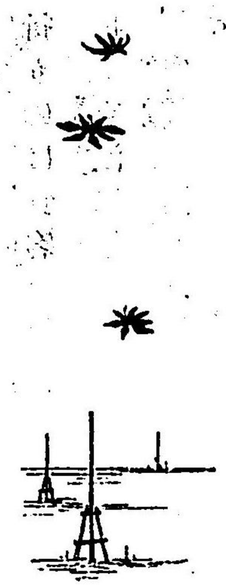
前島密君が官海に在つた時分の事であるが、嘗て命を帶びて獨逸に行かれた、所が獨逸といふ國では國風かは知らないが身分の貴いと賤しいとを問はない、誰れでも大概髯を附て居る、そこで君も考へた、乃公獨り髯が無くては誠に風彩を損するから、附髯でも買つて來て間に合はせやうと、夫れから直ぐ買つて附けたが、如何にも全くの髯の樣に見えるので、之れでは大丈夫だと、其儘馬車に乘つて某官を訪問したのである、主人公は先づ君を上等の應接所に案内して、吳れた、殊に其日に寒むかつたものだから、ストーブの傍に倚子を拉べて話をした、そうすると今迄立派な君の髯がストーブで焚た石炭の暖さで、附けた所の蠟が段々に解けて來て、將さに落ちさうに

成つた、之れは變だナーと手を當てゝ見ると、蠟が付いたので、先生ヤーと許りに狼狽て込んで、忽ち其の家を飛び出して逃げ歸つたとは。

飛んだ債鬼豫防案

憲政本黨の名物男である例の犬養毅が、牛込市ヶ谷に住居を構へて居た時分の事だが、其折りには食客か秘書官體の者を八九人も飼つて置たが、外面は如何にも立派に見へるが政治家の玄關で、其内幕になると憫れなものだ、家賃の滯りは愚ろか、米屋酒屋炭屋何でもかでも借金の八方塞がりといふのが、殆んど彼等が内情であるのさ、そこで木堂も初めのうちは、或る米屋が塞がれば、今度は他の米屋から通帳を拵へさせて米を取るといふ鹽梅しきに、やつて居たけれども、仕舞には殘らず斷られて、結局は債鬼が殖る計りであつたので、例の玄關拵も一々申譯に閉口したのである、そこで木堂先生も一つの妙案を考へ出した、何でも借金取りが門内に這つて來た時に

は、飼つて居つた洋犬のシヨンを唆しかける、すると洋犬も主人への恩顧にと、一層鋭く哮へ懸るので、如何な強る鬼でも、驚怖て門外に逃げ出して了ふ、そうして漸やく、難關を切り拔けたことが幾度もあつたとは、飛んだ債鬼豫防案である。

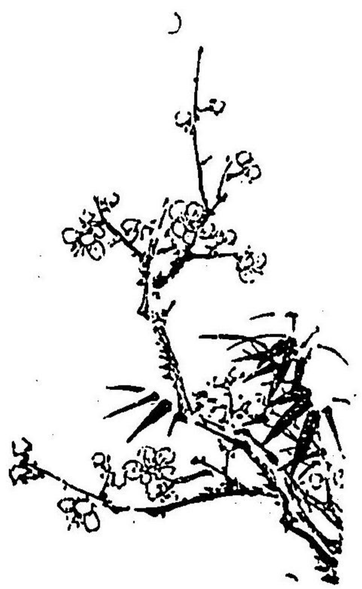


主人公番頭に叱らる

大阪第一の豪商と云ふたら先づ鴻池か住友を指すであらう、そこで鴻池善右衛門は此くも富豪の家に生れた位だから凡ての事に一向無頓着であつた、或時馬車に乘つて例の心齋橋通りに出掛けると、偶々或る店先に誠に奇麗な品物が並べ立てられてあつたので、氏は何の考へもなく其店に這り込んで、面白半分に氣にいつた品を澤山買つた、代價を見積つて三百五十圓程になつたが、折しも善右衛門が懷中にはたつた三十圓しか持合せが無いので、是れだけ入金して置く故品物は後に自分の宅迄屆けて呉れろ、そうしたなれば引換に殘金を悉皆差上げるからと云つて、再び車を飛ばして行かれて終まつた、店主の方では、鴻の池と聞ては賣り損ひは無いと大喜び、品物

を車に乘せて鴻の池に運ぶことゝなつた、聽かて同家の店先に行つて、其次第を通じて代價の請求に及んだ、所が帳場に座つて居た番頭が、一言の下にはね付けて云ふのに、『甚だ御氣の毒であるが、當家には昔しから定められた動かす事の出來ぬ家憲があつて、よしや主人が入用の品物でも、毎月何程と定められた外の支拂は決して勝手にする譯には參りませんから』と云つて應じない、店主は何うか御主人が御好きで、御求めになつたものであれば、今に至つて彼れ是れ申されては困る、左樣言はんで代價を拂つて呉れろと、種々願つたけれども、番頭の嚴正何として聞き入れぬので、店主も立往生の姿であつた、すると善右工門は奥にて聞て居たものと見え、番頭の所へやつて來て、少さい聲で、「何うか今度だけは何とかして都合して呉れ、左樣でないと乃公も店主に對して面目ない譯だ、然し

其代りには來月分の手當の中から引去つても宜しいから』と云つたが、番頭何うあつても承知しない、家憲か自由に曲げられるものでは御座りません、と頑として應じない、かふなつて見ると善右工門も道理には勝てない滋々奥に引込んで終まう有樣で、店主もよぎなく例の品物を車に乘せてあるまゝ、己れの店へ引戻したと云ふ話である。



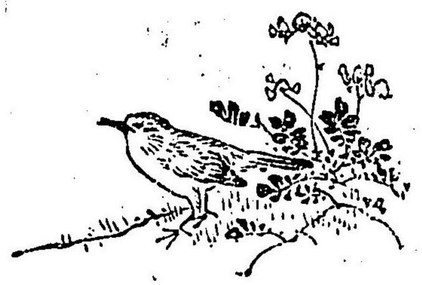
案内狀の代りに口上の駈け廻はり

大隈伯か字を書くことの大嫌だといふ話は、二十年來彼れに昵近して居るものゝ能く知つてる所だが、偖て开は如何な因縁かと尋ねて見ると、伯が其昔し藩黌に通つて、小學の素讀とやらを習つてた時に、生徒一同の習子試驗があつた、すると伯の手蹟は生徒中第一等の拙筆で、何とも點の付け様がない、流石の大隈も此時計りは深く心に耻ち、仕舞つたと見えて、夫れから一生自分で文字を書くまいと誓つた、所が御可笑い事には往年亡父の佛事を營むといふので親類や其他へ案内狀を出す様にと母親から命令を受けた、拙筆先生の大隈も、是れにはとんと閉口して、暫らくの間考へて居たが、仕舞には袴の股立取つて親類中を馳け廻り、一々口上で用を辨じ、とふ

案内狀を書かずに間に合はせて了まつたさうだ。

硝煙彈雨の中で商賣

阿部彦といふたら、相場界の勇將として知らぬ者は一人もあるまい、彼が若い時には全く拳一つで巨萬の富を作らうと期して居つた大膽さ加減には恐れ入つた話だ、然し其野心が當つて幸にも今日の樣な人間になることが出來たのである、今彼れが奇運談を紹介するが、恰度奥羽戰爭の起つた頃、彼れは此變亂を聞くと、之れこそ身を起す時期が來たと計りで、直ぐに奥羽地方に行き、硝煙彈雨の間を駈け廻つて、拂品を買求めた、奥羽地方の人民は戰さのために狼狽込んで、明日も知れない危急に、命に替へらるゝ寶があるものかと、何にもかにも皆な賣り拂つて金にして仕舞ひ、何處の果いても遁れたなら、又た仕合にありつかうと、阿部が云ふに任せて一も二もなく安價で賣拂つた、そこで阿部は、買つた品を殘らず荷作して東京や大阪に送つて賣捌へた、ために非常の利益を得たのである、之れが抑も彼れの世に名を賣り出した始めで、夫れから日毎に奇運を迎へて、とふ〳〵今日の樣な人物となつた。



折角の置物も可惜棚曝

先年佛國で萬國博覽會を開かれた時、日本からも種々雜多の出品があつた所が其中で帝國技藝員の鈴木長吉が鑄造された孔雀の香爐は、三千圓の原價であつたが、意外にも好評を博して、多くの買手が付き、甲は五千圓、乙は一萬と段々競買をする者が出來て、到頭金七萬圓と云ふ莫大な高價で、英國の博物館へ買はれたのである、さわ之を聽き込んだ林忠正氏は、斯ふも我日本國の鑄物が外國人の嗜好に投ずるかと、心窃かに喜んで、自分も一つ大儲をしてやらうと思つて居た、所が米國で閣龍大博覽會がシカゴに開かれる事になつたから、君は手を拍つて此時こそと、夫れから例の鈴木長吉氏に頼んで、金銀で鷹の鑄物を造つて貰ひ、先づ帝國ホテルに持て行き、陳

列して斯道に熱心な方々を招ゐて、秕評を求めると、如何にも能く出來て居たので、誰れ一人として賞贊しないものはなかつた、忠正先生今度は益々氣が乘つて來て、始めは一萬位の正札を付けやうと思つて居たのが、急に二倍にして、金二萬圓と筆太に書いた正札を付けて、閣龍博覽會に出品したのである、先生の胸中では、定めし出品すると、直ぐに買手が出來るであらうと待ちに待つて居たが、的事と越中褌は先から外れると云ふ例令の通りで、君の目算は全く當らなかつた、夫れは、元來拜金主義を以て名高い米國人の事であつたから、金二萬圓といふ高い定價を見て、肝を潰ぶして終まつた と見え、誰れ一人買ふと言ひ出すものがなかつた、先生此に至て如何することも出來なくなつて終つた、して折角の置物も、可惜棚曝となつたと云ふ話である。

此陰謀を御存じないか

井上角五郎君が朝鮮に居つた頃の話だが、或時同國政府の金允植と云ふ役人等に向つて、日本の井上馨や伊藤博文などは朝鮮に對して種々樣々の陰謀を企てゝ居ると、窃かに說き聞かしたので、彼奴の驚きは非常なものであつた、所が此事が日本政府に知れたので、夫れは容易ならぬ話だ、殊に井上や伊藤は大臣となつて居つたから、結局井上のした事は官吏侮辱の罪が成立つと云ふので、とふ〳〵缺席判決を受けた、其內に井上も彼方此方と逃げ匿れて歩いたが、廿一年の一月に福澤宅で、突然警吏に逮捕されて終まつたのである、間もなく例の憲法發布で、大赦の恩德に接することが出來て、再び政海に勇飛したと云ふ譯だ。

脫黨不可の勸告に妻君

往年河野廣中が自由黨で巾を利かして居つたが、何か氣に喰はぬ事があつて、突然脫黨屆を出して歸つて仕舞つた、すると聞き込んだ板垣伯、之れは飛んでもない話だ、何んでも河野に會つて脫黨の中止をさせやうと、急ぎ車を飛ばして河野の宅に行つて見ると河野は早や、姿を匿して何處へ行つたか分からない、伯も之れには閉口してスゴ〳〵邸に戻つて來て、今度は己れの妻女に命じて、河野の脫黨屆を持たせて彼れの宅に遣り、河野の妻君に例の屆を返した上に、淳々と脫黨の不利を說かした、然かも妻君と妻君の政論であつたから、とふ〳〵要領を得ないで、相分れたといふ話である。

此陰謀を御存じないか

井上角五郎君が朝鮮に居つた頃の話だが、或時同國政府の金允植と云ふ役人等に向つて、日本の井上馨や伊藤博文などは朝鮮に對して種々樣々の陰謀を企てゝ居ると、窃かに說き聞かしたので、彼奴の驚きは非常なものであつた、所が此事が日本政府に知れたので、夫れは容易ならぬ話だ、殊に井上や伊藤は大臣となつて居つたから、結局井上のした事は官吏侮辱の罪が成立つと云ふので、とふ〳〵缺席判決を受けた、其内に井上も彼方此方と逃げ匿れて歩いたが、廿一年の一月に福澤宅で、突然警吏に逮捕されて終まつたのである、間もなく例の憲法發布で、大赦の恩德に接することが出來て、再び政海に勇飛したと云ふ譯だ。

脫黨不可の勸告に妻君

往年河野廣中が自由黨で巾を利かして居つたが、何か氣に喰はぬ事があつて、突然脫黨屆を出して歸つて仕舞つた、すると聞き込んだ板垣伯、之れは飛んでもない話だ、何んでも河野に會つて脫黨の中止をさせやうと、急ぎ車を飛ばして河野の宅に行つて見ると河野は早や、姿を匿して何處へ行つたか分からない、伯も之れには閉口してスゴ〳〵邸に戻つて來て、今度は己れの妻女に命じて、河野の脫黨屆を持たせて彼れの宅に遣り、河野の妻君に例の屆を返した上に、淳々と脫黨の不利を說かした、然かも妻君と妻君の政論であつたから、とふ〳〵要領を得ないで、相分れたといふ話である。

名は大臣實は食客

原敬が、曩に星亨の後釜を引受けて、逓信大臣となつた時の事だが、妻子家族は舊の通り私邸に殘して居つた、自分一人が、書生を伴れて例の官邸に引移り、辨當屋から三度の食事を取り寄せて喫べて居た、すると友人が此樣子を見て、何んで斯んな不自由なことをして居るのか、奥樣を御呼びになつたら萬事に便宜だろうと云つた所が、先生莞爾と笑ひながら『君の云ふのも一應は最もジヤが、今の大臣なんといふものは名ばかりで、其實は食客同樣、何時追ひ出されるか解からないのだ、若しも下手に妻子や道具を持ち込むも、さあ逃げる時には大變面倒だから、かふして居るのさ』と答へたさうだ、原が考へも間違へない、僅か二月も經たぬうちに、信用のない食客同

欠

MISSING

君の心棒人だと云ふことを聞き込んだから、何卒か養子に貰ひ受けいたと君の家に申し込んだ、初めのうちはよい加減の挨拶をしてやつたが、其後人を頼んで毎日の如くにせめに來るので、君の父も先方は素封家だしするから、却つて後には本人の爲めにも幸福だろうと思つて、愈々養子に呉れることにした、さあ行つて見ると案外な話で財産が十萬圓に借金が廿萬圓、差引勘定すれば十萬圓不足といふ樣な有樣であつたから、之を知つた君は一時トンダ目に會つたと、只呆れるの外はない、然し今になつて此樣な事情の爲めに、家を去るのは卑怯である、男子として恥づる所だと云つて、其借財を一身に引受けて皆濟したといふ話がある。

自家製造の佛語と馭者の解釋

其昔、大山大將が佛蘭西の巴里に遊んだ時の話であるが、其折大將は同地の名所舊跡を見物しやうと、唯一人で馭者を連れて、出掛けたが、途中で公園の瀑布を見やうといふ考へが起つた、生憎佛語を知らないので、其由を馭者に告げる事も出來ず、何うしたならば宜からうと、種々思案の末、何でも瀧はシヤー〳〵と流れる音がするから、かふ云つて意を通じやうと、早速馭者に向つてシヤー〳〵、シヤー〳〵と呼びながら自分の手を上げ下げして瀧の流れる眞似をして見せたけれども困つた事には一向馭者先生に解せない、大將も公園といふ佛語だけは聞き嚙つて居たものだから、今度は公園〳〵と奴鳴り出すと、續ゐて又もシヤー〳〵を遣つた、すると馭者には初

めて心付たと見えて、馬車を驅つて公園に行き、漸やく瀧を見物して旅館に歸ることが出來たといふ話である。

法を聽て笑ふ者は外道なり

平沼專藏が或時傑僧島地默雷に會つて、法文を聽た事がある、所が默雷が法を講じ始め、軈て彌陀出顯の佳境に入ると、知らず〳〵プーと一發放屁したから、聽て居た專藏先生堪まらない、吃驚して後笑ひ出したので、默雷も之れは失策したと思ひながら、一層聲を勵まし大喝して、『法を聽て笑ふ者は外道なり』と云つて、默つて終まつた、專藏も困り切つて色々と謝したけれども、如何しても聽き入れなかつたさうだ。

名士經世奇談　終

明治三十五年二月十八日印刷
明治三十五年二月二十二日發行

名士經世奇談
正價金貳拾五錢

著作者　岩崎徂堂

發行者　藤田藤藏
東京市神田區千代田町十九番地

印刷者　山本鐵次郎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

不許複製

發兌元　東京市神田區千代田町十九番地　笛浦堂

岩崎徂堂君著
渡邊小舟君密畫

不運の少年

正價廿五錢
郵稅四錢

二十世紀の珍書も尋ねたらば、恐らくは本書の右に出つるものはあるまい、そこで本書は或る少年が幾多の不運不遇を排して、堅忍能く其學業を遂げた云はば實歷談を書たもので、若しそを一讀したなれば獨り無限の趣味とを發見する計りでなく實に立身出世の好材料となるのである、有爲少年たるものは宜しく之を坐右に供へ玉へ

東京市神田區千代田町十九番地
笛浦堂

諸官立學校入學試驗豫備

通信講學院講習錄

（二月廿五日第一號發行）

入學試驗問題義解

會員募集 本會は諸官立學校入學試驗問題に正確詳密の解釋を下し、特に學生諸君の尤も難ずる數學及び英學の如きは特別の講述を以て速成を圖り試驗合格の機會を誤らざらんことを期す。

本會講師 として熟練なる專門家及び諸大家に囑して各科を分擔し、熱心銳意其衝に當るべし、故に遠隔の地にあるも坐ながら良師に就くに異ならざるべし先づ其第一着手として

高等學校、高等商業學校、海軍兵學校、陸軍士官學校 等の諸試驗問題を懇切叮嚀に解釋し一ヶ年にして講了すべし

會費 一ヶ月十八錢 **入會金** なし **規則書** は郵券二錢送らば速に呈すべし

申込所 東京神田區千代田町十九番地 通信講學院事務所